
死亡フラグ回避の華麗な方法～物語の裏で蠢く皇女様血涙編～

ワシワシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死亡フラグ回避の華麗な方法～物語の裏で蠢く皇女様血涙編～

【Zコード】

N7136Y

【作者名】

ワシワシ

【あらすじ】

異世界に転生した日本人、そこは脳筋魔族の蠢く魔界だった！
強さこそ全て！ 筋肉は正義！ 戦いこそが我が霸道！ 人間気に食わぬ 戦争だあ！ の脳筋な魔族の皆さん、勘弁してください。
戦争回避のために今日も奔走、人界三界から陳情山積み、そろそろ
鬱になる頃です。常識とは何ですか？ あすも私は生きていますか
？ 死亡フラグパラメータの上昇を防ぎ、今日も元日本人の皇女は
死んだ魚の目で生きて行きます。栄養ドリンクのビンがしゃれにな
らないほど床に転がって……あれ？ 涙で前が見えない……

そろそろ血涙が止まらない

訃報です。

皇女リュの脳裏をそんな言葉が掠めた。
あるいは、『会議は踊る』とも。

本来、『されど、進まず』と続くべきであるが、進み過ぎて、も
はやもう誰にも止められぬ。
ここは魔界である。問答無用に魔界なので、そういうもののどご納
得していただきたい。

魔界の魔王城の一角。

円卓に着くのは、魔族の内、皇族級以外に、各氏族の長が十五名
である。

蛇龍の長、九頭竜公デボラ。
不死の長、吸血公メルキオラ。

巨人族、巨人公ヨーガ。

天魔の長、鳳凰公カクラ。

水棲族の長、魔魚カン。

蟲族、蝶公ウリト。

悪魔族、美麗公アスタート。

ジン族、大食公シェヘラザード。

氷魔族、氷雪公リスタークテ。

犬狼族、狼牙公シヴァ。

猫魔族、虎公オンサ。

鬼族、剣鬼公パール。

花樹族、花怪公ヒヨウゼン。

邪妖精族、貪欲公アナザー。

造魔族、鎧公グイン。

魔族の有象無象を挙げていけばきりがないが、その中でも特に力
を持つ一五公が一同勢ぞろいし、喧々諤々何を話しているかと言え

ば、実にぐだらなくも血の氣の下がる内容である。

「最近、人間どもが魔界にちよっかいかけてきて、つゝと「うし」の「う」

発言者は見当たらない。

いや、円卓の上に用意された小さな座布団の上にちゃんと座つている邪妖精アナザーが発言したのだった。

切りそろえた黒髪に、黒い羽の彼女が邪悪に言えば、あつさつと九頭竜公デボラが扇を手のひらに打ちつける。

天を突けとばかりに鋭い三角錐の縁の髪がざわざわと動いてお察しのとおり無数の蛇である。

「ぶつ殺してしまえばよろしいのですわ！」

よろしくない、ぜんぜんよろしくない、と成り行きを見守つていたリュは心臓がきりきりと痛んだ。

その肘の上からは黒く、次第にワインレッドへと変わるパゴダスリーブの開いた袖口から覗く手元では、便利屋としていつも同席を強要されるままに、自主的な議事録作成している。

さつと誰も田を通さない議事録ではあるうが、会議と名がつく以上は、と発言を記録する。

「あーあれですな。魔界の資源を狙つておるのでしょうな。ま、ちまちまつぶしていくのも面倒ですし、こには一気に大侵攻といきますかな」

「ぱーっと景気づけに、いいねえ！」

前者は髪をじごきながら一見渋いロマンスグレーに見える吸血公メルキオラ、後者は天魔の長、頭の中身が常夏の鳳凰公カクラが陽

気に言い放つた言葉である。

ぱーっと景気よくやられては、誠にたまらない。

(どうへ、穩便におさめよう)

リュはいつも何もかもどうにでもなあれ、という気分ではあったが、そういうわけにもいかないことは重々承知していた。

こいつら、その場のノリで、誠に大戦争を始めかねないのだ。おまけに、世界警察を気取る白竜族どもから、嫌な書簡が来ていて、これ以上魔族が破壊行為を繰り返すようなら戦争も辞さぬというような内容が婉曲どころかストレートに書き連ねてあった。

(私にどうせよと……)

所詮リュは、皇族といえども、継承権なんか下から数えた方が早いよ！ 生母も淫魔族ゆえにたいした戦闘力もないよ！ という別の意味で情弱ラブフレッシュな皇女である。

しかも、彼女は生前『日本人』であった。

気がつくと、彼女はこのなんちゃってファンタジー世界に転生しており、しかも魔族の皇女などという立場にあった。

幼児のころに、漠然と以前の人格と現在の人格が融合したのではあるが、その感性は、ぶつちぎりで生前寄りだ。

戦闘が三度の飯より大好きな魔族において、ラブ＆ピースで頼みますなどという思考回路で生きているリュは、真の意味で異物なのであった。

つまり、この筋道もに色々ついていけねえ。というのが、リュの偽らざる本音であり、ついていけなくとも、その無茶ぶりは阻止しないと大変なことになるというのだけは理解できるために、二四時間馬車馬のように働けますかを実践してしまっている。いわゆる、尻拭いというやつだ。

(「う、戦争だけは、戦争だけは」勘弁を)

胃の辺りを押さえつつ、リュは「うあいを見計らつてゆつくりと口を開いた

会議終了後、マーメイドドレスの裾をむさぼりて執務室に戻つたリュは、どさり、と椅子に腰を下ろした。長い黒髪がさらさらと肩に流れしていく。

胸元は仕様上開いているが、喉元の襟をくつろげなくなつた。そのまま天井を見上げ、目の奥から走るきりきりとアイスピックで穴をあけられているような痛みに耐えかねて眉根を揉んだ。ゴシツクにゴテゴテとした巨大なナース帽もどきの帽子がずり落ちそうだ。

（なんとか、丸く？ まる……くはないがなんとか収まつた……）

大戦争だけは回避した。

誰も褒めてはくれぬが、自分だけは自分を褒めてもいいよ！ とリュは自画自賛して余計に頭痛が酷くなつた。

空しいばかりである。

ともかく、しばらくはこの手で行こう、とリュは以前に決めたとおりに事を収めた。

すなわち、『弱い人間を掃討したとて、何の手柄にもならぬ。むしろそれを誇つて奴いたら、恥ずかしくね？』作戦である。

魔族は個々の武勇に何よりも重きを置く。

弱いものいじめをして、勝てて当然の相手に踏ん反りかえつていれば、むしろ失笑される。

そこをぐりぐりと言葉柔らかに抉つてやつた。

しかし、弱い淫魔族のリュが発言する際、魔族のトップたちから向けられる視線のプレッシャーときたら、新しいプレイの境地に目覚めかねないほどのあれこれそれであった。

（もうやだ……）

リュは半ば心折れつつも、頭痛をこらえて身を起こした。

マホガニー材に良く似た材質の机の上に山積みとなつている書類をじつと見つめ、見ても減らぬのはわかっているので、これを崩すためにもまずは手に取つてぞつと目を通す。

一通目から、他国から魔族にあてた苦情陳情罵倒遠まわしな脅迫の内容で、氣力が無残に折れそうになる。

一通目も二通目も四通目も通常運転で、次第にその紅玉の瞳から、生氣の光が失われて行く。

五通目、先日使わした和平の使者が祝賀会で暴れたらしい。謝罪文は手馴れたものだ。国交問題に発展しかねないという懸念はもう遠いところに置いて来た。先方もわかってくれている。うん、そういうことにしよう、とリュはさらさら書き付けて行く。

六通目、造魔族ダンジョンマイカーが、また殺人迷宮を勝手に某国の要所近くに設置したらしい。鎧公グインに尋ねよう。そして即刻撤去してもらつ。多分人間達を中心に閉じ込めてフコ呪法する気満々なんだろうな、と見当がつくだけに、おそらく無理だが、お願ひするだけはしてみる。

七通目、某不死公のお身内が、金髪美女ばかり滾つてハーレム作つてゐるからふざけんなとの罵詈雑言がテコラティブにちりばめられている。メルキオラ公におたくの甥ごさんがハーレム形成しているみたいなんで、ぶつ飛ばしてくださいとオブラートに包んで制裁し

てもらおう。多分筋肉思考だから喜んで鉄拳制裁してくれるだろう。八通目、水棲族の姫の銀杯が盗まれた後、人界で呪いを撒き散らしているので回収依頼。これは……うち、悪くないよね、悪いのは盗んだ奴だよね、とリュは書状をぐしゃぐしゃにしかけたが、まずはあのおつそろしい怪魚殿に事情を伺わねばと思つ。

・・・

百八通目。

その案件を裁いた後、リュは完全に死んだ。

目が。

六通目の殺人ダンジョン。某国の皇太子が乗り込んだまま行方不明だつてばよ。

一度深呼吸した後、優先順位を第一位に繰り上げて、皇太子のくせに冒険者の真似事してるんじやねええええ！ と血涙を流した。豪華パーティで涙が本当に止まらない。

エルフの王女等々も身分を隠してご参戦遊ばしていたらしい。

(貴様ら自重しろおおおおおおー…)

頭をかきむしりたい衝動と戦いながら、リュは空中を睨んだ。

彼女にしか見えない、パラメータがある。

この世界にぶち込まれた日から、そつと気がついた日から、リュにしか見えぬ数値。

すなわち、死亡フラグパラメータ。

その予測値は、この案件が現行のままの場合、一種混合のパラメ

ータが限界突破することを指し示していた。

ひとつ、魔界以外の魔界への不信パラメータ。これが天元突破すると、勇者とかその他もろもろやつらが同盟を組んで魔界に攻めてくる。

ふたつ、魔界の裏切り者不信パラメータ。魔界には裏切り者がいます。こいつのリュに対する不信パラメータが天元突破すると、裏切り者は出奔して、対魔族ちーとスキルを身に着けた上、リュはぶつ殺される未来が用意されている。

今回は何とか事前に収めたが、魔界側の戦意高揚パラメータもある。この辺の操作は、なんだか手馴れてしまった感があつてむしろ泣きたい。

そもそも、何故自分にはこのようなものが見えるのか、全ては妄想なのか。

全ては、リュの知る未来の『予言書』による。

しかし、リュに今後の奇天烈な未来について説明した『ナビゲーター』までいる以上、妄想だとしてもひとつ指標として有益には違ひあるまい、とリュは早速に殺人ダンジョンの案件に取り掛かることとした。

今夜はイカを食べようか

ともかくにも、事情を関係者に聞かねば、トリュは最近腰痛氣味な気がする重い腰を上げた。

フットワークは軽くを心がけているが、東奔西走したところで、無限に沸き出でる問題を思ふと、この目の前の案件を片付けたところで差し引きプラスマイナス収支マイナスなんですけれど一体何をやつてているのだろうと暗黒サイドに囚われそうになつてしまふ。

軽く頭を振つて、リュは一番上の深底の引き出しを開けた。

そこにはみつちりと『今日も二十四時間働けますか！？ 中間管理職の強い味方！ 魔界の愛情ドリンク』が並んでいる。一本引き抜くと、淀んだ目でリュは蓋を回して一気飲みした。

以前は、カツと臓腑が焼け付いて、マグマのような熱が身体中に染み渡るような気がしたが、現在は効き目が悪く、薪を新たに三本くべてみたレベルでしかない。

リュはじつと引き出しに並ぶビンの頭を見つめた。

「……もつ一本いっとくか」

執事の好々爺バルにはお控えくださ」と言われているが、正直リュは絶賛栄養ドリンク中毒である。

ちなみに、この栄養ドリンク、執事が補充してくれている。月次の棚卸決算を欠かさぬ彼は、魔界簿記検定リンボ級であるが余談だ。白い手の甲で口元を拭うと、何だかふらふらとするような危なつかしい足取りで、リュは執務室をあとに ふと背後を振り返る。そこには『誰もいない』が、リュは一言釘を刺した。

「 今は出でへるな」

第三者には、リュが空中に向かつて独り言を口にしたかに見えた
だろ？

リュ自身とて、現在は何も見えぬから、目視でなんとなく当たり
をつけていただけである。

（あれの相手をするのは氣力が削がれる……）

彼女は今度こそオーク材のよつた色合いの扉を閉めて執務室を出
て行った。

庭園に面した回廊で、黒い甲殻類を思わせる巨漢の姿を早々と発
見し、リュは今日のラック値は全部使い切ったな、と思つた。

「鎧公」

裳裾をさばき、リュはすたすたと鎧公グインに近寄つた。
鎧公はリュの縦に二倍近く、横は三倍以上、腕も足も丸太のよう
に太いが、全て甲殻で覆われている。
彼はリュの姿を認めて、挨拶した。

『ギチギチギチギチギシギシアンアン』

意訳：リュ殿下、何用でいらっしゃる？

脳内で訳すと、彼は割と理性的に会話してくれるのだが、何故カリュはいつも心にダメージを負ってしまつ。脱力してしまつ、と言い換えるも目的を射ているだろう。

他の公に比べればよほど話が分かると理解しているのだが、なんというか……察してくれ、というのがリュの偽らざる本音である。

リュの精神安寧のため、ここからは、全て自動副音声である。

「公に尋ねたいことがあるのだが、お時間よろしいか？」

『ふむ、某でよろしければ、お付き合つするが』

「ありがたい。実は、鎧公麾下のダンジョンマイカーのことなのだが

『何か問題あり申したかな？』

黒色甲殻に覆われた顔面が、微妙に表情らしきものを作つた。いわゆる、氣を揉むような感じである。

「その、な。設置場所に問題があつてな。アシヤンティ王国からテイランバーグに至るエルフ街道。あの宿場町にな、殺人級の迷宮を無断で設置したらしい」

そこまで伝えて、リュは言葉を切つた。

じつと下から鎧公グインの目?と思しきあたりを見上げてみる。

鎧公はしばし沈黙し、首のか頸なのか良くな分からぬその節目をくきつと曲げた。おそらく、小首を傾げたのだろう。

『それに、何か問題が?』

二人の間を天使が通り過ぎた。

リュは、とりあえず深呼吸してみた。淫魔族としては平均値の胸が大きく上下する。

(大丈夫、大丈夫だ！ 通常運転だ！！)

いつものことである。

国境？ 何それおいしいの？ 領土侵犯？ 土地に名前書きてんの？ 国交問題？ 『いやいややつるせえな。よし、戦つて決着つけよつぜ！ おおおおおお漲つてきたア！

これが『ノーマルな。非常にノーマルな。一般的の魔族の思考形態であり、人族との間に深くそれはもつ深く深く深淵をのぞくとき深淵もまたこっちをのぞいている的断裂を生む絶対の要因なのである。

何度この嘆きの壁の前に膝を屈したことか！

「ああー、公よ。実はこの殺人ダンジョンに、白龍族のやんことなき皇太子が素潜りしあつたそうでな。その上、きやつの探索パーテイには『ティランバーグ氏族のハイエルフの姫なビーリング王族級が名を連ねて皆そのまま行方不明になつてゐるやうなのだ」

『ほほ。それは、見過せませんな』

「で、あらう。そこで、救出と同時に、この生成迷宮を消滅もしくは回収して欲しいのだが」

鎧公の贊同に、内心ほつと安堵の溜息を吐いたリュは、鎧公が口も裂けよど『晒つた』のに気がついて、思わず半歩身が下がつた。

『へへへへ、白龍族の皇太子。いかほど強き者でござりうか。道を失つておるのなら、案内がてら某と手合わせしていただき。殿下、

「安心呑まれい」

今宵の我が大金槌は血に飢えておるわ、などと言ひ出しかねない鎧公に、リュは話の振り方を間違えたと絶望した。

「いや、その、鎧公の申し出、まことにうれしく思つが！　公の手を煩わせるのは私の本意ではない！　ゆえに！　私が自身で向かうので、配下のダンジョンメイカー一人借り受けたいのだがつ」

お相手は、無傷で無事に帰してください、などと頼んでも、絶対によいことにならない。子供の使いもできない魔族の皆さん、過去に何度も実証済みである。

半ば声を大きく張り上げる形で主張してしまつたリュは、不意に己の肩に違和感を感じて絶句した。

「　貪欲公」

リュの手のひらほどの身長しかない邪妖精アナザーが、ちょこん、とその肩に腰掛けて脚をぶらぶらさせていた。その透き通る黒い翅は丁寧に折りたたまれている。

瞠目するリュと眼が合つと、アナザーは切りそろえたいわゆるぱつつん姫スタイルの髪型で、にやりと笑つてみせた。

「くけけ、何やら面白い話しだるのう。わしも一枚噛ませい

いやいやいやいや、とリュは心中に首を振つたが、話して通じる相手ではない。

「貪欲公の求める宝なぞないと思つが……」
「つるさこのう。ダンジョンメイカーがやらかしたときこそ、わし

が引っ込んでおると思うか？ ん？ きやつら本能で穴と穴を縫い合わせてしまうからの、時々とんでもないお宝が断層より生成される。わしの第六感が告げるのよ、この話に乗つとけとな！」

大体外れるじゃないですか、とはリュはとても口にできなかつた。この貪欲公アナザー、身体はリカちゃん人形サイズではあるが、魔力の精密操作と質量にかけては中々悔れないものがというか、リュにとつては大体どいつもこいつも自分より強いので、普通に皆恐ろしい。

『ならば、某も一緒に参ろい』

アナザーが同行するとなれば、鎧公グインも一步も引かぬ。魔界の二大公爵を引き連れて珍道中なぞ、リュは誠に勘弁願いたかつた。

せめて、目立たぬサイズのアナザーの方がまだしも、である。

「あー、鎧公。その貴公からはダンジョンマイカーを借り受けるだけでも充分ありがたく思つので」

『しかし、白竜族となれば、問答無用に攻撃してくる可能性もござるう。殿下を貪欲公が守つてくれるとは某あまり期待できんのだが』

アナザーを見やると、彼女は『はあー？ 金払うんか？』と可憐な容貌をぐしゃっと歪めて唾を吐いた。

彼女に対価として金銭を支払うのであれば、リュは一日を四十八時間にして働かねばならぬ。

貪欲公はその名に恥じぬ強欲婆なのだ。

すなわち、どうやらまったく彼女のフオローは期待できぬらしい。そうはいつても、鎧公は目立ち過ぎる。ステルスしてくれるように機微もない。むしろお願ひすれば、いくら穩健派の鎧公といえど

も、肉体美を誇る彼に、侮辱ととられるだろ。決闘でも申し込まれたら、リュは裸足で夜逃げするよりない。

大体の魔族が、事後に正気に返つて、「かつとなつてついやつてしまつた。でも反省はしてない」と悪びれず平氣で言うのだから、鎧公にもあまり常の理性的判断といつのを求めるべきではない。

（正直、この纖細な問題に配下を遣わすのはテスマーチ以外の何者でもない。私自身が行かねばならぬが、紙装甲ゆえ、ボディーガードは欲しい。欲しいが、ボディーガードが暴走しても私は止められぬ。ああ、悪夢が蘇る……）

ジレンマに陥つたリュは、無意識に二の腕を強く胸の前に交差して肘を抱いていたが、背後からぬうつと伸びた【何か】に、背筋を悪寒が走つた。

気づけば、肩に座つていたアナザーはいない。

「貪欲公？」

視線を彷徨わせたリュは、正しく次の瞬間全身から血の氣が下がる音を聞いた。

（な、何で本氣戦闘が始まつて…？）

庭園に、黒い半球があちこち展開している。空間の断裂である。時折容易ならぬ破裂音が聞こえ、激しい戦闘を伺わせる。同時存在戦闘方式 知らぬ間にきっと彼らは【会話】して、どちらかがぶち切れ、たちまち戦闘に突入したのであるうが、リュのよつな弱小魔族には何があつたのかさつぱり分からぬ。

分からぬが、アナザーがわざと【相手】を激怒させよつと、声をこちらに反響させたので、何となく概要をつかんだ。

「くけけけけけけ！ ケツの青い小僧めが！ ほーれほれ、わしを捕まえてござらん！ 頭に血がのぼつとるのー！ ほれほれほーれ、たーっちー！」

「きやあ！ などというかわいらしい悲鳴を上げることはなかつたが、リュなりに驚いた。

何の前触れもなく、アナザーが己の胸の谷間からひょつこり顔をのぞかせたためである。

「ふー、金貨の寝床ほどではないが、まあまあ及第点じゃの」

ひとつ風呂浴びたおつさんのように大の字にふんぞり返るアナザーに、何をしているのか、と問い合わせること自体むなしさを覚える。大体、金貨の寝床は硬いのではないか、と聞くこと自体愚問なのではあるうが、それに己の胸は劣るか、ヒリュは妙な悲しみもまた感じられた。

ところで、すでに戦闘音は途絶え、嘘のよつな静けさが戻つてきてはいたのだが、鈍いリュにでも肌にびりびり感じられるほどに殺気が膨れ上がる。

「くやしこのひ、くやしこのひ、小僧」

何が嬉しいのか、アナザーは人の胸の谷間に居座つたまま見えぬ誰かを挑発しまくる。多分物凄く悪い顔をしているだらう。見られないのが残念でもない。

すでに殺氣は飽和状態、脚が震えてきたリュはようめいて転げそつになつたところを、背後から鎧公に支えられた。

「ぬ、すまぬな」

『何の』

自然と鎧公を見上げる形になつたが、互いに声を交わすか交わさぬかの内、リュの視界はぐるりと反転した。

リュはそれほど慌てはしなかつた。

ざわざわと荒れる無数のイカタコ的触手の中に絡めとられていたからである。

「 イサーク」

半ば呆れながら、リュはそっと震える触手に五指を触れた。

「お前、本性丸出しではないか」

皇族の一人、粘菌や触手などの不定形生物系統であるイサークは、なんというか色々複雑な血統で、人種でいえば、従兄弟というのが一番近い。

イソギンチャクみたいに手のひらにおさまる小さい頃から撫で回してかわいがつてきたので、リュより遙かに上位種でありながら、何となく気安い感じがする。

イサークは大変器用にも、触手の襞の奥から、舌打ちの音を聞かせてみせた。

『リュ、お前、ババアに好き勝手をせてんじゃねえよ

ぐぐもつた声は、怒りに震えていた。

好き勝手といわれても、あれは不可抗力でな、と言しながら、そついえと胸の違和感が消えていく。

振り返れば、すでにアナザーは鎧公の頭上に避難して、イサークの無様をげらげら遠慮もなく晒つっていた。

ぶちぶちと何かが切れる音がしたような気もするが、おそらく堪忍袋の緒が切れる幻聴であろう。

『ババア、殺す』

リュを保護する以外の流動するかのような触手の動きは激しくなり、アナザーはアナザーで「ああん？ やるのか、小僧」と新たに得た騎馬（鎧公）をけしかけようとしていたが、

「そうだ」

とリュは故意に空気を読まず手を打ち合わせた。

「イサーク、お前人化の術で、しばらく付き合つてくれんか『あ？』

ぴたりと触手の流動が止まる。

「人界に設置された殺人ダンジョンの撤去と、内部の人命救助に向かうのだが、私一人では心もとない。公お一人が同行に名乗りをあげてくれたが、鎧公はどうにもその身の毛もよだつ恐怖の巨漢ぶりが人目を引いてしまうだろう」

鎧公はてれてれと頭部を搔いている。

リュには、この辺の感性がまったく分からぬが、本人が満足ならそれでよい。

「できれば、ステルスできるお前に同行してもらえばありがたいが……人化でも手乗りイソギンチャク化でもどちらでもよい。私は後者が好きだが、女の一人旅もいちいち面倒が多そうだし悩ましい

といひでな

受けではもえぬか、とかなり本氣で頭を下げたといひ、イサークは舌打ちした。

『だから、俺はイソギンチャクでにやないと、あ、噛んだ』

しん、と一瞬静まり返った後、アナザーが腹を抱えて鎧公の頭上で大爆笑し、巨大なひっくり返ったイソギンチャクであるところのイサークはぶるぶると巨大な本体」と震えたが、とにかく鉄は熱いうちに打て隙を『えぬことが肝要であるとリュは重ねた。

「嫌か？」

断られたらそれまでとは思つたが、できれば友好関係にあつて、リュを誤つてぶつ飛ばしそうにないイサークが適任だ。他はなんといふか、戦闘に夢中になつて、【うつかり】をやらかしそうで怖ろしい。

うぞうぞとイカタコな触手をよじれさせながら、イサークはその襞奥からもそもそも喋つた。

『……い、嫌じやない』

いく。

と尻つぼみに答えた巨大イソギンチャクに、もう耐えられぬとアナザーは鎧公の頭から滑り落ち、海老反りになつてのた打ち回つていた。

しまいにはびくびく痙攣していたので、よほどツボに入つたらしい。

イサークは怒髪天を衝いていたものの、戦闘にまでは至らなかつ

たので、リュはかなり胸を撫で下ろした。

今夜はイカを食べようか（後書き）

【一時パーティ編成】

- ・交渉者兼ネゴシエイター？？？ リュ・リュリュリュリュ以下略
- 特筆すべき項目：元日本人で日本食が恋しい。紙装甲。栄養ドリンク中毒。三千世界の中間管理職不憫属性（世界によつては不幸属性）。イサークがいると不憫値が減る代わりに別の隠しパラメータがぎゅんぎゅん上昇するぞ！

・イソギンチャク狂戦士バーサーカー イサーク

特筆すべき項目：イカタコな触手うぞうぞ。手乗りイソギンチャクで限定魅力度UP。人化もできるぞ。幼生時に撫で回され過ぎて取り返しのつかぬシスコン。残虐性もそれなりだが、本当の口調はもつと幼いぞ！

・邪妖精アンシーリー・コート アナザー

特筆すべき項目：地獄の吝嗇家。金貨が大好き。邪妖精繁殖とは別に、五百年に一度妖精の中から生まれる特別な邪妖精。他人の不幸で飯が美味しい。混乱状態にないので、味方を売り飛ばしたりはめたりするぞ！

・ダンジョンメント：バランス崩壊も甚だしいよ。

歪みないその旅の仲間

アナザーが「ほんならとつと行くかい」といきなり転移球を開しようとしたので、リュは死ぬ氣で止めた。

「はあ～？ ニュートラル座標に跳べ？ 何で遠回りするんじゃ？ ああ、分かつた分かつた。土下座は止めい。まだるつこじいの～」隙あらば蠅叩きしそうとぐすね引いて狙いをつけているイサークから充分距離を取つて、アナザーは空中に金字を転写し、転移の計算を始めた。

リュは駄々をこねられぬかと冷や汗かいたものの、存外あっさり引いたアナザーに胸を撫で下ろした。

領域には、領土・領海・領空というものがある。

あの辺はティランバーグ氏族が繩張りを張つてるので、いきなり告知もなく転移すれば、それこそ宣戦布告と受け取られるだろう。

例えるならば、クソまじめな優等生の目の前でタンバリンを鳴らしながら反復横跳びして挑発するに等しい行為であり、私は貴方に喧嘩を売つていますと告げるのと同じである。

衝突を避けるためこれから出向くところのこ、事態を悪化させてしまうだけの間抜けだらう。

アナザーが計算を弾いている間に、再度鎧公にお願いする。

「鎧公、ではダンジョンマイカーの件頼んだぞ
『心配されるな。すでに近隣にいる者を現地集合にて、呼び寄せ
てござる』
『感謝する』

リュは一礼し、背後から口の肩にのしかかるイカタロ触手に指先を這わせた。

「イサークよ、その身なんとする?」

『……【擬態】を考えているが』

「【擬態】か。それもよいが、久しづりに小さくなつて背中に張り付かんか? 攻防一体で便利なんだがな」

うつかり敵や味方に攻撃されても、自己防衛のためオートマチックに背中のイサークが迎撃してくれるだらう。

安心安全絶対防御で、紙装甲には定評のあるリュにとつて實に心安らかである。

触手の襞の奥、イサークはしばし沈黙して、

『絶対嫌だ』

はつきり断つた。舌打ちすら聞こえてきた。

「やうか

地味にショックを受けたリュではあるが、この世はままならぬが常の彼女は表情を取り繕い流すこととした。

「さて、貪欲公の準備も粗方終わつたようであるし

全てを言つ前に、イサークはすでに縮んでいた。

巨大イソギンチャクから、小さなクモヒトデモドキへと、腕わんと思しき部分が、四足歩行にすつと立て、ちまちま歩いて来ると、リュの足元で止まる。

リュは笑みを零し、しゃがみ込んで両手のひらひらすべく上げよう

としだが、

べしつ

ヒトデモドキは、触手と思しき腕でリュの手を拵つた。

更に駄目押しのショックを受けて笑顔も固まるリュであったが、イサークは勝手にリュの腕に巻きついて、うんしじうんじょとばかりに上り始めた。

そのまま肩口まで這い上ると、定位置とばかり巻きついてだんまりである。

背中は拒否されたが、腕や肩なら良いらしい。

何の違いがあるのか分からぬが、イサークも難しい年頃なのだ。年長者は、黙つて成長を見守つてやらねばならぬだろうとリュは心にそつと思つたのであつた。

ちょうどその時、頃合だつたのか、

「計算完アジヤ！ 十秒後に転移するぞ、者どもよー。」

すでに複雑な金字回路を撃ち終えていたアナザーが叫び、リュは慌てて歪みの走りに身構えた。

アナザーがテンカウントを始める。

「十」

「九」

「ゼロー！」

（待て。間の数字はどうに行つた！？）

つっこむ前に、問答無用でリュ達一行は転移した。
西方アシャンティへと。

リュは大地に両手と膝をついてこみ上げる吐き気をこらえていた。
いわゆる【転移酔い】である。車酔いの親戚の手ごわいおばちゃんと思つていただきたい。

『大丈夫かよ、お姉様』

俺、あんまり治療得意じやねえけど、ヒイサークがもぞもぞ腕のあたりで蠢いているが、リュは正直動くなと言いたかった。

とりあえず、余計に悪化するので、何やら数の増えているその触手で治療は試みないで欲しいと精一杯伝えた。

下手をすると死にますので、とはとても言えなかつたが。

「まったく、軟弱じやの。わしが若い頃は、転移即戦闘じやつたぞ」

宙にホバリングする虫ならぬアナザーが器用に胡坐を搔いたまま己の武勇伝を語りだすが、それ恐らくピンポイントに相手の領域に直接出現しまくつて、たちまち侵略行為と見なされていた暗黒時代のことだよねとリュは更に目から生気が失せて行くのを感じた。

そう、だから『魔族が世界征服に侵攻して来る』などという言い伝えが各地に残つてしまい、実績まであるので不信感を煽りまくつて魔界以外の国家に包囲網同盟なんぞ結成されてしまうのだ。

次第に吐き気も收まつて来たりュは、アナザーやヒイサークがいるからと怠つていた現状確認をすべく、ようやく辺りを見回した。

畑である。

見事な黄金の絨毯が目前に続いて……いない。

収穫前の麦畑に突如として出現したリュ達の周囲、大掛かりに麦がべきばき外側に向かってへしあれている。

無残だ。

リュは緩慢に周囲を見ました。

そして察した。

間違いない。

ミステリーサークルを作つてしまつていた。

リュは別の意味で大地に再度手足について、不明にうめいた。

(ミステリーサークルとか……)

何この敗北感！　ヒビリシヨウもない葛藤が己の内側を駆け巡るのをしばし耐える。

上空から見るとナスカの地上絵並のそれに、発見した農夫が教会に駆け込んで村ごと大騒ぎとなり、『神のお告げだ』いや『世界崩壊の予言だ』のと近隣を騒がせてしまうことになるのだが、リュはそのはつきりと見える可能性について考えぬことにした。

この程度は、もう水に流して漬物石を上に載せて銀河の星星と碎けて人の噂も七十五日していただかないと、心臓がもたない。

膝小僧を払つて、リュはよろめきながら立ち上がり、周囲を再度確認した。

(ん？)

違和感に眉根を寄せた。

『なんだよ？』

敏感にリュの揺らぎを感じ取ったイサークがたずねてきたが、「いや」と意味のない言葉を呴き、もう一度景色を確認した。

黄金の麦畠。

麦がばきばきに折れまくつたミステリーサークル。

農家の畠さんすみません。と三つ畠で心が折れかかる。

そしてリュは、ぱちぱちと畠を瞬かせた。

「 イサーク」

視線を【それ】から離さぬまま、独り言めいて問いかける。

「あの案山子、なんだかこちらに近づいていいのか?」

『ああ? あ、本当だな。つて、ちげえよ。あれ、ダンジョンメイカーじやねえか』

鎧公が現場に呼び寄せてくれていたダンジョンメイカーは、完全に藁のかかしであった。

大体、ダンジョンメイカーといつのは生態系がほとんど不明で、麾下においている鎧公自身も恐らくよく分かっていないのではないかと推測している。

彼らは一様に、『でたらめな子供の落書きや造形』のような姿形をしていて、特殊な例だと、本当に落書きの【線】が動いている者もある。

案山子は麦畠を突つ切つて、明らかに風景の一部と化し、完全なる保護色となっていたが、その顔つきが目視できるほどに近づいてくれば、無機物はない違和感が満載であった。

鍔を背負い、のんびりした足取りで近づいてくる案山子は、片手を上げて挨拶した。

「ちわーつす。モイモイだヨー！ ようしくしてねー！ 今後とも
『愛顧賜つてヨー！』

大層軽かつた。まるでヘリウムガスのように軽かつた。多分普通にこいつ浮くんじゃないかと思わず足元を確かめた。

リュは身体中からいろんな物が駄々漏れに大自然へと回帰していく気がした。

人はそれを氣力と呼ぶ。

「……ああ。鎧公配下のダンジョンメイカーであるな。出迎えご苦労。私は偉大なる恐怖の魔王陛下が第十七皇女リュだ。こちらはアナザー公、腕に巻きついておるのがイサーク皇子」

これから臨時にパーティを組むことになるため、簡単に紹介していくと、モイモイと名乗った案山子ならぬダンジョンメイカーはふんふんと素直に頷いた。

それに力を得て、リュは説明する。

「これからエルフ街道に設置されたダンジョン潜入となるゆえ、そなたのダンジョンメイカーとしての力に期待しておるぞ！」

モイモイは力強く頷いた。

「モイモイに全部任せたヨー。今からミラクル見せちゃうヨ？」

え、おい、待て、とリュは何かいうはずだったが、現実はいつも予想より斜め上である。

案山子の落書きそのものである丸い殴り書きの田は、カオスでぐるぐる渦巻いていた。

ええ、通常運転です、とリュの脳裏に何か聞こえた。モイモイが鍬を振り上げる。

「ダンジョン生成ヨー！ モイモイのビッグマグナムで殿下もエクスター^{はつじつ} 滅刺ヨー！」

待たぬかー！！！！！ とリュは叫んだ。

叫んだが、鍬は大地に振り下ろされ、かつと白光した。全て事後だつた。

その日、アシャンティ王国にミステリーサークルと新たなダンジョンレベル3が生成され、世界破滅の予言とか災厄の前触れとか調査が入つたそうだが、リュは関係者の記憶をもみ消した上、全力で証拠を隠滅した。

この時、ぎゅんぎゅん例のパラメータが上昇して、リュは後始末が終わるやいなや動悸と眩暈でしばらくへたり込むこととなつた。

こうして四人（？）旅の仲間は揃い、不穏と不安と一部欲望渦巻かせながら迷宮を目指すこととなつたのだったが、開始前にしてすでにリュのライフゲージがじつそり削られていたことは、お察しいただけることと思つ。

魔族な従兄弟が触手過ぎて、今夜も眠れない。

しらみつぶしに、レベル3ダンジョンやミステリーサークルにする人々の記憶の【上書き】をして回ったリュは、ぐつたりと宿屋の机に突っ伏していた。

モイモイに迷宮撤去させた後、ダンジョンは最初からなかつたことになつたし、ミステリーサークルは村人たちが自ら荒ぶる芸術の衝動に突き動かされて麦を踏み倒しまくつことになつた。教会の皆さんには、「何もなかつた」と報告してもらうためおとなしくお帰りいただいた。

（すまん、収穫前の時期に正直本当にすまんかった。あとで補填するから許してくれ。だが、そもそもダンジョン生成より撤去が難しいとかおかしくないか？ いらぬ時間をくつた……何故殺人級、ダンジョンに辿り着く前に、このよつな目に……）

もつぱら【揉み消し】はリュの専門分野であるが、せめてこの臨時パーティの面々には、当面本題の前に自らトラブルをクリエイトするのは自重してくださいと言いたかった。

言つたところでどうにもならぬのはすでに悟りの境地まで達しているが、リュの種族的特性による情報操作にも限界がある。さて、リュの出自淫魔族とは下級悪魔に分類されるが、その大きく共通する特性のひとつに【夢】を操る能力がある。

リュもまた一族の代表的特長に漏れず、【夢魔】としての側面を持つている。

腐つても皇族であるリュは、【夢魔】としてはいわゆる高位のリス級、【夢】引いては【記憶】や【精神】に関しては、偽りと金メッキ加工のプロフェッショナル かもしぬなかつた。

大体いつもその能力はもつぱら揉み消しと揉み消しと揉み消しに

しか有効活用されていないのではあるが、……しかも精神侵食の抵抗値が高い者にレジストされれば、呪い返しとばかり打撃^{ダメージ}が逆流してしまうのみならず、本体を探査特定されてしまうこともあり、やたらめつたら乱発できる能力ではない。

所詮は一般人向け、微妙に使えねーと言われる所以なのであつた。

今回は精神世界に構築された【夢魔城】の配下ナイトメアやインクブスを召喚^{サモン}しての面目躍如であつたものの、いつもそういうまく行くとは限らぬので、本当に自重していただきたいものである。

ちなみにインクブスに担当の当たつた村人は幸いである。よい夢見られましたね、と親指を立ててやりたい。しかしナイトメアに担当された男性村人もまた幸いである。馬面に背後からアーッ^{アーッ} 躊躇され、別の性癖に目覚めることができたであつた。

馬面マッスルナイトメアは『フオーフオッフオッフオッフオッフオッフオッフオッフ』と大歓喜で踊るような足取りのまま帰つていつた……とても満足そうであつた……

翌日、筋骨たくましい村人の何人かが虚ろな目で「おかあちゃん、おかあちゃん」と呴き続けて寝台から出てこなかつたそうだが、リュは聞かなかつたことにした。記憶の上書き、塗り替えとは、犠牲なしにはなしう冥府魔道なのだ。

突つ伏したまま周囲の喧騒を聞いていたリュは、女たちの黄色い歓声にびくりと肩を震わせた。

邪妖精アナザーが宿屋の一階に設けられた酒場の一角にて、にわか露天商をしており、女たちが群がつてている。

「けけつ、これを使えば、マンネリ解消、今夜はフイーバー間違いなしであるぞ！」

「ほんとだか！？ 骨抜きだか！？ 隣村のアリサにこれ以上おらのあつどに色目つかわせねえだよ！ 今夜はおらが畑に種さまいてけろーつて誘つてみるだ！ きやーつ！」

「おらにも売つてけれ！ あ、この禍々しくも垂涎の形状のこれはなんだべーつ」

「お客さん、お旦が高いのーつ、これはなんと で××で でかくかくしかじか」

「なんだつて！？ そげな……はあん！ おらの口からはとてもとても！ 妖精さんマジナイスだべ！ おらにもこれ一つ頼むべつ 「ああんつ、こっちのこれはなんだべさ！？ えつ、そんな、まさか！？ そげな効能が……よつさ、おらも女だべつ、奮發すつから、これをこんだけ売つてけろ！…」

「まいどありー！」

リュは今度こそ聞かなかつたことにした。

貪欲公アナザー、村人から僅かな金銭巻き上げてなんとする、とリュなりに思うところもあるのだが、元手ほとんビタダのものを売つているそのうので、売り上げ＝利益らしい。

それでも魔界の十五大公爵自らそっち系の売買で日銭を稼ぐとはなんという真似をしておるのだと悲しみがこみ上げてくる。

お前の藏、金貨が唸つてゐるんだる、とつっこみたいが、一銭を笑うものは一銭に泣くということなのであるうか。

「妖精さん、おらの旦那が、夢見が悪かつたのか、今朝から『尻の穴がひきい！』つてしきりに叫んで錯乱してゐるんだべ。なんかいい薬ないだかー？」

リュは思わず噴出しかけた。

(ナイトメアー！…)

配下のせいです、明らかに私の配下の仕業です、とリュは更に突つ伏した。

指揮したのはリュ自身なので、その罪は全て私のものです、と涙が出てくる。

しきしきと顔面を覆つて泣きたかった。

もうこれ以上は聞きたくない。何も聞きたくない。

一方、酒場の別の一角ではモイモイが【不思議な踊り】を披露して、やんやんやの喝采を浴びているが、お前らその踊りによつて何か別のもの吸われているぞ、と忠告してやりたい。

いや、もうよい。ほつとこう、とリュは諦めた。

それより、今後の段取りについて考えた方がマシとこいつものである。

ダンジョンには、ざつぱらんに次の等級がある。

レベル1	洞窟
レベル2	枝分かれ
レベル3	人工物（軽トラップあり）
レベル4	本格的トラップ有り
レベル5	自動生成迷宮固有魔物
レベル6	魔法トラップ（ワープゲート等）
レベル7	殺人級（固有BOSS生成、固有レア有り）
レベル8	伝説級（異界ゲート生成、伝説級固有レアドロップ）
レベル9	神話級（神話級固有レア？？　ぱるふんてぱるふんてぱるふんて）
レベル10	????　あるのか????

今回は、レベル7の殺人級ダンジョンである。トラップも盛りだくさん、迷宮固有の魔物が自動生成されており、彼らは魔王配下の魔族とはまったく別の生態系にある。

つまり、指揮下になく、こちらを襲つてくる可能性どいか、実際に襲撃されるだろう。

（ダンジョンメイカー、その能力は未知数……本来造魔族といった既存の枠に收まりきるものではない……恐らく【異界渡り】か【亞神】、【墮神】の一種……しかし【創造神】ではない……时空の歪み、【界】と【界】を縫合する能力は、本人たちの思う以上に異常なもの……）うしてみるとただのアホにしか見えんが、監視は怠るべきではない……）

あるいは【システム】の一種か、とリュは密やかに思考を巡らせるが、シリアルスも長続きはしなかつた。腕に巻きついているはずのイサークの姿が見えなくなっていた。

「イサーク？」

返事がない。

がばつと面を上げたリュの第六感は大変嫌な方向に的中していた。イサークは、容器の中に【口】を突っ込んで、何かを一生懸命攝取している。

酒、だつた。

ざあつとリュの顔面から血の気が下がった。
飲むなと言つたのに、分かつたと彼自身言つていたのに、何故、と思う。

彼女はなりふりかまわづ絶叫した。

「総員退避いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！」

いつもそうなんだ。

全ては事後なんだ。

なんだなんだと村人たちがリュを注視して、不審をその面に浮かべた。

逃げて逃げて逃げてええええ！ とリュは懸命に訴えた。イサークがふにやつと触手を持ち上げた。人で言うと、顔を上げた、といった感じのしげさだつた。次の瞬間、イサークは『ばきよばきやばきやああああああああ！』といった擬音とともに、巨大肥大化分裂し、野太い無数の触手が宿屋の天井を突き抜けて天に咆哮した。その触手には、村人たちをがっちりホールドして、耳をつんざくような奇声を上げる。

きつと遠くから宿屋を見れば、屋根や窓から無数の触手が突き出し、蠢く様はさぞ壯觀であつたことだらう。

これ、なんて大怪獣映画、とリュは呆然と穴の空いた天井や犠牲になつた村人達が吊り下げられている光景を見上げる。リュはなんとなく懐を探つた。【胃】空間宝物庫と直結のそこに、目的のものを見つけた。

『魔界の愛情ドリンク』

無言で蓋をひねつて一氣飲みした。

忍ばせてくれた執事の愛情が染みる。彼もぶつちやけ武闘派だけれども、優しさは大事だ。

モイモイが「きやつほー！ キタコレ、殿下ワイルド過ぎて痺れるヨー！」と鍔を片手に飛び回つてゐる。何がそんなにウケたのか、リュには分からなかつたし分かりたくもなかつた。

また、アナザーは襲い来る触手を器用に錐揉み飛行で避けてさつ

さと外に避難した。ついで村人の懐を探る仕草に、火事場泥棒のような真似は止めなさい、とリュは注意したかった。

阿鼻叫喚地獄絵図の中、ドリンクを飲み干した皇女リュは虚ろな目で立ち尽くし、後始末について算段していた。

魔族な従兄弟が触手過ぎて、今夜も眠れない。

魔族な従兄弟が触手過ぎて、今夜も眠れない。（後書き）

【今日の語彙表現】

夢魔城：精神世界に構築された夢魔の共有情報領域である【壇】でも【城】級のもの。主にリリス級の夢魔にしか設置できないぞ！リュ殿下は密かに【大図書館】を構築しているとの情報がリークされているぞ！

妖精さんのお店：清く心の正しい紳士淑女青年少女の前に現れるレアもの露天商だ。垂涎もののレアアイテムが手に入るかも！？御代はちょっとぴり、魂を少し盗まれるだけだよ！

【胃】空間宝物庫・"じ"、誤字じゃないんだからね！ 宝物を貯蔵する石竜の胃袋を利用しているらしい。執事のバアルが整理整頓棚卸をしてくれているぞ！

ビオ ンテ・イサーク：酒精を摂取すると我を失つてばきよばきよ巨大化するぞ。R-18形態もあるともっぱらの噂だ！ 残念ながら、大人の事情でよい子の皆には見せられないぞ！

お前の　が翻れるのやこをかけたから覺悟しろ

目的地に達する前に既にライフはゼロです。
そんな気がしないでもないが、どうにかこつにカリュ達一行は推定レベル7殺人級ダンジョンへと辿り着いた。

「ほう、これはこれは

腰に手を当てて前のめりにホバリングするアナザーの言葉には、感心の色さえ見て取れた。

緑滴る山地の参道には、不思議な形状の門がリュ達を出迎えた。一本の柱を貫で固定し、その上に島木と笠木が渡してある。鳥居に酷似したそれは、延々と等間隔に連なつていて。まるで伏見の千本鳥居のようだ。

不明の象形文字で描かれたのぼりが風にはためき、山頂までずらりと橙に灯る提灯が吊り下げられている。

誰が灯したわけでもあるまいに……

リュは険しい表情で鳥居もどきの導く山の上を見やる。

「【異界】が混じつてこるな。レベル7ビーハウドはなにかもしれん

氣を引き締めてからねばな、と咳き、一回酔いとハッスルかましたせいでだるそうなイサークがずるずるリュの腕から滑り落ちそうになるのを肩に押し上げてやった。

「ゆくぞ」

彼らはモイモイを先頭に、一の鳥居を潜った。

【トラップ発動】

は？ とリュは一の句も告げずに震撼したが、一基田の鳥居のトラップはすでに発動していた。

奇しくも、同時にイサークがすべしゃつと腕から落卜して、声を呑むリュだけが

推定レベル7殺人級ダンジョン内部に転移された。

「おおおおおん、と不思議に澄んだ音がする。

壁に響く水滴の音か。

あるいは木靈なのか。

案の定【転移酔い】にしゃがみ込んでしまったリュは、流石に警戒を怠るわけにはいかぬと口元を押された状態で周囲を確認した。正直壁に手をついてしまいたいが、別のトラップが作動しても困る。

人工物の壁面には、奇妙な笑いのシンボルの仮面と交互に灯りが暗い通路を照らしている。

（やつておれん。全員ぱらぱらに飛ばされたのか、あるいは我だけ切り離してワープさせられた……？　しかし、あの転移揺れは、せいぜい一名分……大掛かりな転移魔法には、もつと時間がかかるし、揺らぎがあるはず……空間魔法のエキスペートであればレジストも考えられる……ならばもし迷宮に【意思】もしくは【知能】があるなら、確實を狙う……つまり私のような最も最弱のもの。パーティ内で一番弱い者を迷宮内に放り込んで、残るメンバーの焦燥とミスの誘発を狙つたものだとしたら……）

リュは手のひらで覆つた口元の下、恥々しげに笑つてみせた。

（相当に【えぐい】仕様だな。なるほど）

つまり、前に入つた連中も【同じ田に呑つた】と容易に推測される。

彼らの焦燥混乱、役に立たない集団の崩壊誘発ミスが雪だるま式に膨れ上がりて全員^{みんな}行方不明状況を作つたのだろつ。

さて、ここでじつと見ていても始まらない。遭難時基本は動かなの方がよいとされるが、この場合は恐らく迷宮の意向を考えるにそれは【当たらない】だろつ。

イサーク達と合流しなければならぬが、救難要請ができるかま
ず試す必要がある。

リュは使う予定は微妙であつた【魔杖・抜け落ちたアレ】を取り
出した。

白い象牙のような杖であり、膨大な魔力が込められている。
ぶつちやけ、イサークの初生え変わり乳歯である。

抜け落ちた際に、上の姉や兄が大喜びで「記念に加工してやつた
！後悔はしていない！」と触れ回っていた。すつたもんだの末、
何故かリュに贈呈された。結構便利なので重宝している。

媒体としては最適である。

リュは杖を撫でさすりながら「ホールしてみたが、うんともすんと
も応答がない。

「……だらうな

半ば諦観めいて肩を落とした。

この性格の悪さが滲み出るダンジョン、容易に外部との通信を許
すとは思えない。

ジャミングされているわけだ、とリュはさっぱりあきらめること
にした。

嘆息とともに前後を確かめ、ひとさし指を舐めて唾で濡らし、真
っ直ぐ立てる、風の流れを確認する。

おや、と片方の眉をが上がる。『風の流れなんてぜんぜん期待し
ていなかつた』が、冷たい空気を感じる。

誘き寄せられている可能性もあるが。

リュは行儀悪く舌打ちして、「おい」と空中に呼びかけた。

「ナビ。出で来い

しん、と答えるものはない、通路には沈黙が枯れ葉のじとく降り

積もつたが、リュは苛々とした語調を隠さず再度促した。

「一度は言わんぞ。駒が死んだら困るのはお前だろ？」

「ちひり、と蠅燭のしんが狂おしく身悶えた。

そしてリュもまた、全身に鳥肌を立てて、その場に飛び上がった。こきなり、「ふう！」と耳の穴に生温かい息を吹きかけられたからである。

後退つて、片方の耳を押され、リュはおもいつきり威嚇した。

「貴様アつ、氣色の悪いマネをするなー！」

空中に、禪一丁の限りない肉体美を誇る下まつげばしばしの男が唇に人差し指を当てて、「ワーオ」的お色気ポージングしていた。マッシュルな男は半透明で、ふよふよと浮かんでいるが、その存在感は淫らー。田を離せない！

『ん、も、う！ リュ殿下つてばお短氣さんー』

ぱちん！ とウインクついでに投げキッスされたので、リュは思わずのけぞつた。

無性にイライラとくる上、おぞましいわー とリュの腕に鳥肌が立つていてる。

「嫌がらせか！？ 嫌がらせなのか！？？？ その格好で出でくるなと何度も言つたらわかるんだ貴様あああーーー！」

『もおーつ、ふりふりしないのー！ アタシは空氣を読んでるだけなのー、シリアルになり過ぎたら多分死亡陵辱フラグが立ちそつて思つて、お笑い要素で回避させてあげてるのよ。テラカワイソスワロスつてアタシの思いやり？』

「ワロスといつたな貴様あああああああ！」

『声を潜めなさいな。敵性クリーチャーに気づかれては知らないわ』

頭に血が上りかけていた自分に、リュは大きく肩を上下させた。このクソナビ、いつかナイトメアの餌食にしてやる、と固く決意する。

からお願いしてこられたの……」

リコは心の中でぎつぎつ歯軋りした。

「いつかお前の顎がめりめり割れたらいい。というかもうすでに割
れているが……とにかく、私の座標とイサーク達の座標を解析して
くれ。無理なら周辺の生体反応及び索敵頼む」
　　^{サーク}

『んもー、ちつちつといじるからナビ使いが荒いのよねーっ、まあアタシに【気がついて】くれただけでも御の字なんだけれどー。どの世界でも貴女つてばアタシに気づかないからいつもやきもきしてたのよー。はいはい、いらっしゃないいらっしゃない。アタシはこいつでも貴女の一番の味方よッ』

ウインクは暗黒の海に沈めてやつた。ナビはメタ発言が多すぎて困る。

リュは、いまだにこのナビゲーターという謎の存在について僅かなことしか知りえていない。

が元に来たれ。

しかし、もしナビゲーターと呼べばいいんじゃないかしら？ と
由ら駆け乗った彼が、この世界に生を受けて頭がパーンしそうなリュ

のストレスの海から生じたわけではなく、本当に存在するのでは
ば

『あやつ、やだー。何これ乱氣流ー。ダメダメ、全然座標特定でき
ないわあ。言つならば表も裏もないメビウスの輪それとも境界すら
ないクラインの壺つて感じかしら。ちょっとやだーこれ面白いわあ。
ミニマムに面白いトライしてるのねー』

「私はせんせん面白いわけだが、察してもらえんか」

その程度の期待も私には許されんか、リュは亥いた。

『かりかりし過ぎよー。貴女淫魔の癖に生前に囚われすぎなのよね。
もつとフリーダムに生きた方が……ア』

ナビの『ア』があまりにも小声であつたため、リュはかえつて不
吉に感じた。

「何だ」

『時計方向に三時の方向、生体反応有り。敵性存在も同時に補足。
んんー、わんわんが十匹、まだ増えてるわあ。どうするの?』

「その口ぶりだと、イサーク達ではなさそうだな。先に目的のゴー¹
行発見かもしれん。ゆくぞ」

『んまー、戦闘力ゴミのくせに大丈夫?』

「お前本当に私の味方か? なあ味方なのか? 味方面した敵だろ
? な、正直に言つても今なら許すぞ。今が最後のチャンスだぞ」

軽口なのか憎まれ口なのか不明のやり取りをしながらリュは先を
急いだ。

正直確かに戦闘能力は5……ふ、ゴミめ、レベルなのでこのまま
逃亡してしまいたいのではあるが。

(これを看過した場合のパラメータ予測値が……しゃれにならん)

逃れられない運命のようである。

ナビの誘導で何度も角を曲がり、リュは最後のそれで脚を止める。おぞましい咆哮の最中、血糊でほとんど全身濡れかぶつた男が一人、半ば腐乱した犬狼もどき相手に大立ち回りを演じている光景に遭遇した。

男の鎧はボロボロに腐食し、あるいは欠けて破損している。髪も髭も伸び放題、しかしその目だけはぎらぎらと、生に執着する者だけが持ちえる炎を灯していた。

(いかん、どれだけ戦闘していたのかわからんが、かなり疲労が蓄積している……)

男の闘志はいまだ費えぬ。

しかし、その体力はもはや風前の灯である。切り伏せたと思ったのだろう、踏みつけかけた腐乱狼が、がばあと口をあけて跳ね上がった。

男は驚愕に目を見開き、慌てて蹴り上げたが、今度は背後から別の狼が襲う。

もはや捌き切れない。

男の青い目は絶望に染まつた。

恥すべき無毛から事情聴取

男の目が絶望に染まる。

リュは反射的に、あるいは計算ずくに【魔杖・抜け落ちたアレ】を掲げた。

彼女の口から放たれた言葉は、いわゆる【圧縮言語】であり、ワンフレーズの短いそれであるが、意訳すると以下になる。

『眷属よ、我が元に来たれ。あの犬ころどもを好きなだけ蹂躪するがよい。前後上下四方八方よりもふつてよい。私が許す。ちなみに、犬ころに比べて恥すべき無毛の男は勘弁してやれ。多分ショックで死ぬと思うから、な、分かるだろ？ その辺のニコアンス察してくれよ。そうだ。男の周辺の犬ころどもを思う存分鬻るのだ。お前たちのふりによって恍惚の眠りへと引きずり込むがよい』

状態異常【強制睡眠】を引き起こす魔法である。

この手の状態異常は、夢魔種のお家芸であろう。

リュは他に【強制催眠】【強制混乱】等の状態異常魔法が得意であるが、強者には通用しないため、いわゆる雑魚向けの魔法としてご理解いただきたい。

杖より、黒の核を持つた灰色スライム状【影の者ども】が長い魂の尾を引きながら無数に沸き出でて、腐乱犬狼もどきに次々と巻きついた。そして存分にもふり倒す。

何か触手を彷彿とさせる形態であるのは、触媒のせいであろう。

抵抗により、無効判定となることもあるが、今回は、存分に効果を發揮した。

『わ、わふう』

『きゅんきゅんきゅうううう』

犬こるどもはひつくり返り、腹を見せて【服従】のポーズをしている！

そのまま彼らは安らかな眠りの世界へと滑落していった。

「たわいもない」

リュは『いい仕事をした』とばかり、己の額を拭つた。労働者の汗である。

ナビゲーターが「……」と何か言いたげに、微妙な表情を浮かべて空中に胡坐をかき腕組みしているが、満足げなリュは気づかなかつた。なお、風もないのに彼の褲はたなびき、頭に巻かれたタルバンドの帯もまた吹き流されている。

その時、呆然と立ち竦ぐす男が、からん、と剣士の命である剣を取り落とした。

彼はリュをガン見しており、やがて癪にかかつたようごぶるぶると震え出す。

あ、とか、う、とか言葉にならないつめきを発し、よろよろと一歩踏み出した。

鬼気迫る様子に、リュは思わず後退すると、杖を差し向けた。

「止まれ。これ以上近寄るなれば、こちらも考え方がある」

警告に、男は伸び放題の頭髪の下、驚くほどに青い目を大きく見開き、敵意はない、とばかり両手を胸の前に上げる。

「う……あ……」

何か訴えようとして、更に一歩前へ。

不注意であったためか、足元の狼によろけて転げた。

立ち上がろうとするが、足腰に力が入らぬのか、手を突っぱねてまた無様に転倒する。

男は 泣いていた。

「お……おお……」

まるで子供のように。ぽろぽろと涙が零れ落ちるのを、拭うことすらもせずに、ただひたすらに泣いている。

リュは 杖を差し向けたままであったが、ナビにちらりと視線を投げた。

【無声言語】と呼ばれる精神感応によつて指示する。

『照合してくれ』

ナビはたちまち行方不明の白竜族を始めとする王族構成パーティメンバーの姿絵と照合し、回答を弾き出した。

『あらら。これは驚きネ。彼、白竜族の第二王子バルドウイーンよ。彼らの平均寿命でいうと、ここ一ヶ月間の行方不明期間では信じられないくらいに【老化】しているわ』

予想通りの回答に、リュはたちまち舌打ちしたくなつた。

(「の迷宮、相当だな）

第一に仲間と分断させる。

第一に焦燥とミスを誘発させる。

第二に 【時空間もしくは体感時間の乱れ】。

（外部と時の流れが異なるのか。あるいは、体感時間の引き延ばしとともに、迷宮探索者の新陳代謝を加速させるのか）

前者はかなりの大技であり、リュ「」とには太刀打ちできるものではない。

後者はすなわち、幻影魔法に通じるものがある。幻影の火事により『火傷した』と思い込んだ場合、実際に身体が火傷状態になることがある。これは思い込みが身体に反映されてしまうのであるが、時間において迷宮がこの男に同じ技を仕掛けたのであれば、僅かな時間で自らを老化させてしまったという可能性も捨てきれない。すなわち、男は仲間と分断される形で迷宮に放り出されて後、數十年の時を孤独に一人さ迷い続けた、ということだ。

リュはゆっくりと杖を下ろした。

男を刺激せぬよう、大きくもなく小さくもない、優しい声で話しかける。

「　白竜族のバルドウイーン殿下とお見受けした」

はつ、と男は面を上げる。彼の瞳は左右に激しく揺れ動いている。

「私はリュ。エルフ街道に設置された推定レベル7殺人級ダンジョンにて行方不明となられた殿下方の救出及びダンジョン回収に来た冒険者です」

魔族とは名乗らない。いきなり切りかかれても困る。

リュは右手のごぶしを左手のひらで包み込み、額へと捧げる。敵意はないと告げる万国共通の仕草である。

男　バルドウイーンも慌てて同じ仕草をした。よし、とリュは内心ガツツポーズした。

戦時国際法により、24時間以内は互いに互いを傷つけることは

できない。

これを破れば、およそ全ての国家より信用されなくなる。

目撃者は全て「ヨー」すればいいよ、と言に出しかねないのが魔族であるが、彼らは卑怯であることを何よりも嫌うため、かえつてこの国際法にはもつとも忠実であると言われ、一番影でこれを破つているのはむしろ人種であると云われる。

「…………わた…………わた、し…………は…………」

男はもどかしげに口を開いたが、舌が強張つてうまくしゃべれぬ様子であった。

無理もない、トリュは頷き、隠し玉は展開の上、彼に一步一歩近寄つた。

やがて手の届く距離にまでとなり、上から見下ろす形で友好的に笑顔を作る。

「焦らずに。私は幻ではありません。殿下もまた。まずは安全な場所まで移動しましょう。」ひは血生臭過ぎる

バルドウイーンは伸び放題の髭の下口をもじりと動かし、瞳を揺らめかせたが、やがてはつきつと頷いた。

ナビに安全領域検索させ、リュとバルドウイーンは一人はにわかにキャンプを張つていた。

事情を伺いたいが、まずはアイスブレイキングすべきである。リュは【胃】空間宝物庫を開いた。宝物庫には阿吽あくのうがある。阿側に引き入れていたため、取り出し可能であった小型鍋に肉団子、ベ

「コン、野菜くずを入れ、調味料の塩コショウ、ブイヨンを振りかけると、携帯コンロにかけた。

油が浮き出て、肉汁のなんともいえない芳香が充満する。

だらだらと涎が零れ落ちそうな勢いでバルドウイーンは鍋が煮え立つ前からそわそわしていたが、椀にすべつてやるとお前噛んでないだうという猛烈なスピードですすり、あつといづ間に全て空にしてしまった。

バルドウイーンは、時折むせつつ、食べながら泣いていた。涙が止まらぬようであった。

リュは食後の白桃茶も沸かしていたので、彼に差し出してやる。彼はようやく【香り】を楽しむ余裕ができたのだろう、茶の芳香を吸い込み、ひとじまいひきついたよつて皿を瞑つて口元を一文字に引き結んだ。

しばしの沈黙を許し、バルドウイーンが茶杯に口をつけて一口すつた後に、本題を切り出した。

「さて、殿下。何があつたのか、このコトメにお話し願いたい」

すでにバルドウイーンの目には、確かな理知の光が宿っていた。彼は口のど元を押さえ、「あ、あー」と何度も発音練習し、とつとつと話始めた。

はじめは。

異界からの【マベリ】であったと。

「【マベリ】が……エルフに会いたいと言い、竜神がそれを許したことから……全てが始まった……警護は最高のものが……我々王族も含めて……準備された……」

バルドウイーンは途切れ途切れながら、次第に滑舌を取り戻し始めた。

リュはパンをあぶりながらチーズを乗せる。チーズは熱にとろとろと溶けて行く。物欲しげなバルドウイーンにひとつ差し出し、そっと視線をナビに向けた。器用にも逆さになつて胡坐をかくナビもまたリュを見つめていた。無風であるにも関わらず、奇妙な風圧をリュは感じた。

（ バランスブレイカー ）

来るべき者がとうとう来たのだ。

リュは、いわば世界の異常にに対するストレス値を【調律】する駒である。

だから、パラメータの上下を常に正常へ戻すべく行動を求められる。そうしなければ、【死】ぬように紐付けられている。しかし、バランスブレイカーはその逆を行う者。全てのパラメータはでたらめにのた打ち回るであつ。

（迷宮の発生自体が、バランスブレイカーによる一次的誘引災害である可能性は否定できない）

頭の痛いことだ、と彼女は両手で包み込んだ茶杯に口をつけた。バルドウイーンの口ぶりであれば、彼は少なくとも、【マレビト】に好意的ではなかつた。

そのため、バランスブレイカーである【マレビト】の波及効果によって【排除】された可能性がある。

バルドウイーン殿下と二人きりでは心もとないどころか、彼の不幸に巻き込まれる危険も念頭に置かねばなるまい。

(一刻もはやく、イサーク達と合流しなければ)

その前に、詳しい事情を聴取せねばなるまい。
リュは更にバルドウイーンの話を促した。

経過良好ノルマ達成

バルドウイーンの話を更に詳しく聞き出そうとした時だった。携帯コンロの火が、ぱちり、と大きく跳ね上がった。

異変に対するバルドウイーンの反応は素早く、己の剣の柄に手をかけ、リュを背後に庇うかのように位置どった。

『空間が連結するわー!』

ナビが警告し、リュは慌てて【魔杖・抜け落ちたアレ】を胸の前に引き寄せ周囲を警戒するが、タイミングを言えれば遅きに失していった。

ざくり、と田の前に空間を裂いて破れ田が生じる。

奇妙なそれは、周囲にプロック状に亀裂を走らせて行き、ぱらぱらとパズルのピースのように崩壊した。

その向こう側に、まったく別の通路が延びており、

「バルドウイーン!」

男子学生服を着た艶やかな黒髪短髪美少女と思つたら、声が低かつたので、美少年だつた。

彼は構えていた剣を下げ、驚きから喜びへと表情を塗り替えた。

そのアーモンド形の田は零れ落ちそつなまでに見開かれ、星を浮かべたような漆黒。

あれか、中性的美形という設定か、とリュは激しく動搖した。

彼女ならぬ彼を守るようにして、ウエーブした金髪に白竜族がよく好んでつける額飾りをした白騎士が前に出ており、傍らに釣り目がちなハイエルフの女性がレイピアを引っさげて凜と立つている。それから、犬耳か猫耳か狐耳か分からぬが、獸耳とふさふさの

尻尾の目じりに朱色の化粧を施したピンク髪美少女。赤と黒の着物をはだけた状態で着ており、肩は剥き出しで、帯は解けそう、高下駄は転げそう。それ着ている意味あるのか？ ヒリュはつっこみたかつたが我慢した。

そして何故か銀髪オッドアイの無口そうな薄着透け透けワンピースというよりネグリジェな美幼女もいる。若いうちから露出狂か、とつっこみたいのもリュはこらえた。

咄嗟に【彼ら】を順次確認したりュはあまりにも突然のことに思考がストップしてしまったが、それ以上に形容に『美』と『中』がつきすぎて、もう両眼は『うおおおおおお目が、目があつー』とストライキ寸前であった。

正直言わせてくれ。そう彼女は思った。

何この下は美幼女から上は美女まで美形ハーレム集団、と。

（あの白竜族は騎士の輩出で名家とされるブルマ一家のカタリナ、エルフ耳はティランバーグ氏族のスーリア姫、獣娘は知らん、無口そうな銀髪金赤オッドアイ幼女も知らん、あとはあの中性子爆弾もとい中性美少年は何故か黒の学制服、まさか日本人か？ おい、日本人か！？ というか、白竜族皇太子の姿が見当たらんではないか、どうなつとる！？）

人はそれをパニックという。

杖を握り締めたまま、リュは混乱の谷底に突き落とされていった。
『ぐり、と唾を呑み込むか呑み込まないか、中性子爆弾がぱつと見惚れるような笑顔に花を咲かせた。

「よかつた。バルドウイーン、バルドウイーンだろ？ あんまり様子が違うから、一瞬分かんなかつたけれど、精霊がバルドウイーンだつて教えてくれたし、オーラですぐ分かつたよ！ 無事だつたん

だな！

背後に庇われたリュは、緊張に強張っていたバルドウイーンの肩が、僅かな逡巡の後、弛緩とも脱力ともつかぬ形でゆっくりと下がる過程を見てしまった。

「この有様だが……なんとか。こちらの婦人に助けられた」「ん？ その人誰だ？ あ、俺は花守刹那はなもりせつな！ 刹那って呼んでくれよな。ええっと、貴女は……」

「リュと言います。冒険者です」

「へえー。貴女みたいな女性が冒険者？ あ、えっと、ごめん。侮る気はないよ。俺、こっちの常識いまいちわかつてなくてさ。あーつと、つまり」

頭をかいて困った風の彼に、獸耳着物娘がふん、と鼻を鳴らす。

「主殿、見苦しい。いちいち言い訳するでない。いちごいちの出自が異界だのなんだのと触れて回るつもりか？」

「タマモ様、厳しいなあ……つてばらしてるしー。あー、うん、俺異世界から来たんだよね」

リュは相槌を打つべきであろうか、驚いてみせるべきであろうか、リュはとても悩んだ。悩んだ末にとりあえず折衷案とした。つまり曖昧に笑いながら頷いた。実に日本人の魂が彼女の根底に刻まれきつている証明であった。

しかし、他に話すことがあるのであるのではないか。

(遭難していたバルドウイーンの状態についてとかバルドウイーンの状態についてとかバルドウイーンの状態についてとか)

「ととと、こっちも紹介遅れてるな。この人、いやこの方はタマモ様。大妖狐で、俺の式をやつてくれるんだ。あー、陰陽師つて分かる?」

リュは遠い目をしないようにするので精一杯だった。

「……いえ」

「あーうん、異世界の魔法使いと召喚師みたいなもんだって理解してくれよ。こっちの銀髪ちびつこも俺の……式みたいな? こちらの世界で契約を結んだんだ」

「ぐく、と銀髪オッドアイ幼女が頷く。見た目どおり無口キャラで押し通す気のようだ。

すると、幼女を押しのけるようにして、エルフ娘がじれったそうに口を開いた。

「ちょっと、セツナ。私の紹介は後回し! ? 別に紹介してほしいわけではないけれど、何で王族の私が紹介後回しなの? 順番考えなさいよ」

「……セツナ、私も忘れられるのは好きではありません」

前者はエルフのスーリア姫、後者は騎士装束の白竜族カタリナである。

「あー、スーリアごめん。俺こっちの常識よくわからんなくつて……カタリナも忘れてたわけじゃなくつて……」

「べ、別につ、常識は……その、私と……前に覚えてくれればいいんだから」

「こによいこによと呟いて後ろ手に指を絡ませもじもじとするエルフ

の姫から、紛れもない秋波が撒き散らされていたが、刹那はまったく感知していないようであった。

（鈍感スキル……）、「これは間違いなく……」

「ふふっ、私も少しづがままをいつて刹那を困らせてみたかっただけです」

「カタリナさん……」

がつくりと肩を落とし、なんとか一人を紹介してみせた刹那に、口元を押されてくすくすと笑う白竜族騎士カタリナ。

（カタリナ・ブルマー。本来、ブルマー一家は忠節厚い白竜族きつての臣と聞いていたが、田の前のこれを見ていると疑わしくもなるな。バルドウイーンの安否……自己紹介で刹那少年をからかう前に気にせんでよいのか）

リュは内心開いた口が塞がらなかつた。
想像以上に強烈だ。

（これが……バランスブレイカーの能力の一種なのか？）

本来あるべき正常な思考を奪うということなのか、もともと全員このような気があつたのか、前者であれば恐ろしいし、後者であれば、やはりある意味恐ろしい。

（あらゆる美女美少女美幼女とフラグを立てまくつて）「見たが

……ん？）

何故か空中に漂つナビがものすごく氣の毒そうな田でリュを見つ

めていた。

その口が、ゆっくりと動き、指はリュの胸を指している。

(……お、おい。まさか)

突然現れた彼ら。

出会いは偶然ではなく必然だとしたら？ 本流を捻じ曲げてでも運命を引き寄せる。それ自体がバランスブレイカーの能力。そのことについて深く考える前に、もうひとつ残されていた爆弾が投下された。

「とにかくこれで安心して引き上げられるな。紫桜音達は別れて探索しているから、すぐこっち呼ぶよ」

バルドウイーンの背中越し、リュの対外用の笑顔が固まる。肝心の白竜族皇太子が見当たらないことについて、懸念は確信へと至りかけている。

「あ、紫桜音は俺の妹。一緒にこの世界に来たんだ。バルドウイーンが行方不明になつてすげえ心配してたよ」

「……そうか」

後半を振られたバルドウイーンの返事はどこか精彩を欠いていた。リュもまた、後ろで顔色を失っていた。杖を握り締める手が震えて来る。

「ちゅうのほうすぐがみだれる（バランスブレイカー）。

一人じゃなくて、二人だとか。
聞いていない。

「空間の精靈よ、紫桜音たちとの間に通路を開いてくれ！」

刹那の非常に簡素な願いとともに、再び空間がばらばらと崩れて行き、裏側から別の光景が現れた。

今度こそ、通路の向こう側、本当の純和製美少女が桜色をした指先を口元にあて、目を見開いてぽろぽろと涙を零している。

「よ……かつた……バル、無事だつたんだ……」

彼女はとても小柄だったが、非常に刹那に似ていた。巫女のような頭飾りと白い衣装で、清楚可憐を絵に描いたような少女である。妹の紫桜音とやらだろつ。

周囲に、今度は男性美形一人と美幼児一人が彼女を守るように陣形を組んでおり、見慣れぬリュの姿に半端ではない警戒＝殺氣を発している。

恐らく白龍族皇太子らしきプラチナブロンドに肩マントの男が、冷ややかな目つきで明らかにオーバーキル機能つきの神剣を半ば抜剣しかかっていたり、魔術系統に技能を集約していそうな文系青年は笑顔のまま攻撃魔法無言詠唱始めていたり、青銀髪の美幼児はひとつしと少女の袖口にくつついてこちらを警戒混じりにガン見している。

今日もリュの死亡フラグ立ては順調なようである。

正直すまんかった

「バルドウイーンの背後の女、貴様何者だ。名を名乗れ」

とんでもない銘がついていそうな神剣と見える類の得物を抜き払いかけながら、白龍族皇太子レオンハルトが詰問する。

リュは【慌てて】杖を置き、地べたに膝をついた。外套が汚れるが、元々そういうことを想定して選んだ暗めの色地なので問題ない。

白などは言語道断である。保護色にもならんビリウカ、田立つではないか。

「わ、私はアドベンチャラーズ協会『灰の水曜日』^{ウェンズデイ}に所属しておりますリュと申します」

何、トレオンハルトは「よく僅かに柄を握る手を弛緩させたのを見て、リュは利き手を背に回して『攻撃の意思なし』と示したまま畳み掛けた。

「高貴な方々、御身が下界より消えてすでに一ヶ月近くの時が経過しております」

はっ、と彼らは互いに視線を巡らせ、あるいは肩を跳ね上げた。すなわち、バルドウイーンは絶望ともいえる驚愕にて、他の者は純粋な驚きに。

おやうへ、彼らはそれに【体感時間】が違うのだ。

「女、続ける」

許可を得て、リュは肩膝をついたまま、とつとつと説明を続けた。

「協会より、このレベルフダンジョンの生成による被害調査及び可能な限り事態収拾に努めよとの要請があつて、私が探索の名譽に預かりました。また、たまたま幸運に恵まれてバルドウイーン殿下と合流できたのです」

話を聞くレオンハルトの表情は懷疑的であったが、真偽を確かめるべく、リュを背後に隠す形のバルドウイーンに矛先を向けた。髪も髪も伸び放題であり、血糊と埃塗れで異臭すら放つ弟に対し、レオンハルトはどこか汚らしいものを見るように厭わしげである。

「バルドウイーン、今のは、誠か？」

バルドウイーンはしばらく面を伏せがちであったが、質疑に対しつては、顔を上げてはつきりと答えた。

「腐敗した魔物の集団に襲撃されていたところを、彼女に命を助けられました」

そのまま兄である皇太子レオンハルトを強く睨み据えるかに続ける。

「もし彼女がいなければ、今私はここにいなかつたことでしょう。見てのとおり、私はこの迷宮で時間の概念に見放されて一人戦い続け、この有様となりました。身体より先に心が折れかけていたところを、リュ殿には、命のみならず絶望の淵から救つていただいた。感謝こそすれ剣を向けるような恩知らずな真似はできない。兄上、エルツ、私の恩人はどうかその得物を突きつけるのは止めていただきたい。私の身内を恩知らずにしてくださるな」

彼の眼差しにも言葉にもいたとかの揺るぎもなかつた。

覚悟の気が背中より立ち上るかに見え、リュは内心バツが非常に悪かつたが、とりあえず便乗させていただく。

つまり、あえて否定しない。沈黙は実に雄弁である。

レオンハルトは無言のまま弟をじつと見詰めていたが、その手は柄から離れることはなかつた。エルツと呼ばれた文官系眼鏡男も魔法展開をしたまま解除はしない。

奇妙な緊張が彼らの間に滯空していたが、鶴の一聲でそれも氷解した。

「え、あのねつ、リュさん？ 貴女が、バルを助けてくれたんだよね？ ありがとうー！」

疑いに険悪な雰囲気になりかけていたのを、紫桜音が素直に御礼を言い、ね、と周囲に同意を求めるよう笑いかけたからである。

即時戦闘に移行しかねない懸念すら抱かせたレオンハルトを始めとするメンバーは、虚を突かれたように目をしばたかせ、『仕方ない』とばかり表情を緩めた。

弛緩したのはリュも同じである。いざとなれば、自爆覚悟の大技も考えていたが、それは諸刃の剣であった。使わずに済めば、それにはこしたことはない。

（やれやれ、武器は取めてくれたか）

リュもほつとして、バルドウイーンとともに安堵に力を抜きかけた瞬間、

毛穴が全て開くかのような圧倒的殺意が膨れ上がった。

駄目、と口を開きかけて黙ってしまったのがよかつたのか悪かつたのか、後になつてもリュには分からなかつた。

迷宮内で、人為的に空間を無理やり連結すれば、大きな『歪み』が生じる。水面に、石を投げたようなもので、波紋が周縁に達すれば、逆算して石が投げられた場所を特定することも可能だ。

それが二回も。

より計算の精度は上がり、【彼ら】は異変の場所を探り当て、そしてリュを見つけた。

【彼】はとても怒っていた。

激怒していた。

何故なら、邪妖精とダンジョンメイカーを置き去りに転移した瞬間、信じがたい光景を目にした。

そう、脆弱とはいえ、魔族の皇女であり従姉でもある【彼女】が、白竜族に頭を垂れていたから。

地べたに膝をつかされていたから。

服従の姿勢をとつていたから。

何よりも。

【彼女】自身に、虫けらを見るような蔑視と殺意が浴びせられていたから。

だから、彼の太い【手】は彼女の胴体を巻き込んで口の元に引き寄せ保護しようとしたし、同時に周囲の人間を肉片に変えようと無数に放たれた。

この時、いろいろなことが同時に起つた。

彼の無数の【手】は男女の区別なく、全てを自動的に攻撃対象と

識別し襲い掛かった。

本来なら、一瞬の内に決着は着いただらう。

【彼】の力であれば、白龍族であろうがエルフであろうが、赤子の手をひねるようなものである。

あまりにも力が強く、ほとんど制御できていない【彼】であるが、物を壊すのだけは得意であった。

つまり、人を肉塊に変えるのであれば、ほとんど精密さは要求されない。

【彼女】だけは守ればよい。それはとても簡単なことだ。だから真っ先に確保した。

己の不注意で【彼女】の行方が一時でも分からなくなり、そのことが耐え難いほどに【彼】を混乱と不安に突き落としていた。そのため、確保次第この常態サイズでもみくちゃに撫でるか這いずり回して存在を確かめる行為に没頭したかったが、どうせ実現できるはずもないことも【彼】には痛いほど分かっていた。興奮のあまり傷つてしまふかもしれないし、肉体的問題く精神的問題の解により、せいぜいミニサイズで引っ付くしかできないだろう。諸々の衝動は後でゆっくり妄想に昇華することにして、欲望は理性でぐちゃりとプレスして捻り潰す。

【彼】は動物が餌をとり次第安全な解体場所を確保するのにも似て、まずは周囲の掃除にとりかかることを優先したのだ。

【彼】は掃除が容易であることを何一つ疑っていなかつたし、【彼女】も【彼】の力を知るがゆえに不安を覚えることもなかつただらう。

いや、あるいは【彼女】リュは一抹のそれを感じていたのであるが、大体において悪い予感というのはあたるものである。

そもそも予感というのは、第六感というより、五感で取り込んだ情報から総合的に弾き出した未来予測だ。

リュの予測は悪い方に天秤を傾けており、その傾きに足るだけの情報がすでに彼女の中に蓄積されていた。

本流は捻じ曲げられる。

「きやあっ、セツナ！」

「主殿！… わらわでは抑え切れん！」

「暨、下がつて！」

異世界の少年は、周囲の女性陣を守るべく自ら触手を切り裂いた。一方、異世界の少女を守る男性陣は、すでに前衛が崩壊していた。

「殿下、もちこたえられません！」

「くっ、エルツ、詠唱を続ける。シオン、私の後ろに……しまつ」

悲鳴の形に櫻桃のような唇を開いた少女は自衛の手段を持つていなかつた。

恐怖に歪む少女に、しかし、【世界】が味方した。

リュは視界がぶれたかに感じ、吐き気と眩暈を同時に覚える。ありえない、強制リンクだった。

彼女の脳に、直接突き刺さるような情報の断片が注ぎ込まれた。

【ナビゲーターのリンクを確認してください。緊急のため強制リンクされます。この項目はHELPを参照してください】

【緊急案件、バランスブレイカーによる味方陣営への危険度緊急に

該当する強力な能力顕現を確認】

【リスク回避のため、自動的にマインドハック能力《リリス級》により読み取ります】

【マインドハック能力《リリス級》による読み取りに成功。情報を確認します】

【バランスブレイカーの溺愛補正発動 失敗。対象イサーク（宇宙の恐怖）にレジスト成功されました】

【対象イサーク（宇宙の恐怖）のアライメント判定混沌（Chaos）・邪悪（Dark）】

【混沌（Chaos）陣営は強力に抵抗可能もしくは無効判定となります】

【溺愛補正失敗、対象のレジスト成功により、対象イサーク（宇宙の恐怖）はバランスブレイカーの《守護者》に敵対判定されました】

【バランスブレイカーの《守護者》攻撃ロック解除】

【以下精霊の愛し子発動】

【以下精霊王の忠誠発動】

【以下竜神の花嫁発動】

【以下世界に愛される全能力発動】

ドミノ倒し的に一瞬で全てが布石を打たれると同時に発動し、終わった。

悲鳴を上げたのは恐らくリュであった。

肉片と液体が飛び散り、リュは頭からバケツで水をぶちまけられたかのよに、全身にそれを浴びた。

リクエスト短編：いくつの夜と朝（前書き）

この話は、突発企画のリクエスト短編です。
リクエスト内容：イサークがいかにしてシスコンになつたか、イサ
ーク視点で

リクエスト短編：いくつの夜と朝

イサーク、と呼ぶ声がする。

彼は混沌の海にまどろんでいたが、声に呼ばれて【目覚めた】。

イサークが最初に発生【顕現】した時、彼は単純なアメーバ状生物であつた。

流動する細胞質を持ち、単純細胞であつて、多細胞ではなく、すなわち原核生物であつて真核生物ではなかつた。

彼は数多ぐいる兄弟の中で、発生と同時に放置ネグレクトされていたのであるが、そのことを疑問に思つたり悲しんたりするような思考形態は有していなかつた。

何しろ、アメーバである。

性別すらないが、彼は【彼】だつた。

発生した彼は聴覚視覚といったものを持つていなければだつたが、その【声】が呼びかけ、【触れて】来ると、細胞質を悪寒めいて漣み立たせた。

嫌悪ではなかつた。

むしろ、それは欲情にも類する渴望であつた。

もつとも単純な細胞を持ちながら、もつとも可能性に満ちた彼は、最初に原始的な欲を覚えた。

ただし、その欲は食欲にも似ていた。

彼は【声】をもつと聞きたいと思い、彼もまた【触れたい】と願い、自らを突然変異させた。

欲望自体が、環境変化である選択圧となつて彼の設計を自らデザ

インセラセたのである。

仮足が飛び出し、蠢く触手となり、彼は自らに触れる何かに巻きついた。

「ちよ、おー、イサークが触手になつた！」

声の主は慌てており、イサークは離されてなるものかとますます巻きついた。

また、彼は何の疑問もなく、自分がイサークである、とこいつとを受け入れ、理解していた。

言葉すらも核に由来の知識の泉から引き出すように、彼の理解の範疇であった。

「まう、変異しおつたか。うんともすんともいわんで放置しどつたが、案外見込みがあるかもしけぬ。どれどれ？」

細胞をつままれた上に強い力で、引っ張られたが、イサークは絶対離れまいと更に触手を増やして一重二重に巻きつぐ。

「……懐かれておるな」

「よし、リュよ。そなたに任せた！」

「変異させ続け、強き者とせよー！」

口々に耳障りな声たちは言い、イサークがひつしと巻きついている何か リュ？ が焦燥したよひ、

「はー？ ん、ちょっと、無責任なー？ ん、ビコに行 転移し
おつた、おいつ、いつもじおりかー？」

最後諦めてぐつたりとしていた。

その頃には、イサークは【田】を発現していた。

きょろり、と田はリュを見上げる。

イサークの姿は無自覚ながら、不気味でおぞましいものではあつただろう。

しかし、その瞳は無垢であった。

実際、無垢である者ほど、どこまでも無慈悲で残虐になり、始末に負えない可能性があるのだが、それでもリュは毒氣を抜かれたものか、イサークに巻きつかれた指の隙間を、反対の指でさすった。

そろそろと触れる指先はおつかなびっくりであり、しかし発生してから長らく放置されていたイサークには新鮮な驚きであった。本来なら、触れるという行為は、敵対行為とみなしてしかるべき危険なものである。

しかし、イサークは『もつと』と願つた。

何を『もつと』なのか、イサーク自身にも明確には理解していかつたかもしない。

ただ『もつと』『もつと』『もつと』と強く欲望だけが膨れ上がる。

それをどうしたらよいのか、どう消化したらよいのか分からなくて、イサークには狂おしくももどかしかつた。

リュの口元をじっと田は見つめ、同じような器皿を発現させべきか考慮した。

できるかな？ と彼は思慮し、できるだらう、と結論づけた。

実行するのは後回しになつたが……何がリュの琴線に触れたものか、ひたすらに撫で回され続けて思考が霧散したからである。

せつかく発現した触手も解けて、イサークはアメーバ仕様となり、べちゃりと落下した。

すなわち気持ちよさのあまり、骨抜き状態であった。

リュが慌ててイサークを拾い上げ、「大丈夫か！？」と顔色を変えていたが、イサークは反応することすら億劫であった。

しかし、撫でられるのが止まってしまったことは大いに不満を覚え、仮足を飛び出して、リュの腕を捕えると強制的に自らの頭上と定めたそこに引っ張る。

もつと撫でろ、の意である。

「……あー、やつきの続きでよいのか？」

イサークは比呂として頷いた。

彼の【知識】に照らし合わせると、リュは呆れたよう眉根を寄せていたが、不意に苦笑した。

リュはイサークをすくい上げると、震動をさせぬようゆっくり移動した。彼女は椅子に座り、自らのひざ上にアメーバをそっとおろして、彼の細胞質を撫でた。

イサークは震えた。

彼は一度多細胞に変化しながら、だらしなくとけたアメーバであった。

形質を保つことができない。

りゅ、と彼は呼んだ。

誰にも聞こえないだろう。

でも、彼は、りゅ、と呼んだ。

気持ちよくてたまらない。

再び、自らの奥深くから欲望の声が湧き上がる。

『もつと

『もつと』

『もつと』

何を『もつと』なのか。
何が足りぬというのか。

この姿では駄目だ、というのだけは、彼にもはつきり分かってい

た。

『もつと』 大きくて。

『もつと』 強くて。

今度は。

何が今度なのか分からぬ。
でも、そうしなければならない。

そう思ひのと同時に、その『もつと』は大きく捩れて歪む。
どうしようもない、彼の本来の性質が、奥の奥から叫んでいる。

それは無視できない本能だ。

後に、イサークは己の救われぬ性質と「うものを知ることとなり、
悩み、葛藤することになる。

つまり、イサークはリュをぐちやぐちやにしたかった。

大切にしたいと思ひのと、ぐちやぐちやにしたかった。

それはあまりにも強い衝動で、未成熟で若い雄が同種の雌に向ける性欲と酷似していたが、イサークの情欲はむしろ食欲と同義であつただろう。

イサークはリュを取り込んでしまったかった。
だが、相反することに、絶対に嫌だった。
そんなこと、できるはずもない。

その薄暗い衝動と向き合ひ前に、もつひとつターニングポイント
があつた。

しばらくして後、彼は「」の姿を見て絶望することになる。リュが田の前におり、イサークのことを怖がらないから、自分もまた彼女と同じような姿をしていくと思つていた。

触手などの器官を発生させており、それを駆使しておきながら、何故かイサークは田の姿をリュと同じ生物であるかに思い込んでいたのだ。

しかし、鏡を見て、彼は絶句することになる。

あまりにもリュの姿と違つた。到底同じ生物とは言えなかつた。醜かつた。

驚き、憚いて後ずれり、後退する自分の移動手段が無数の仮足であることに気づいて、声にならない絶叫をした。

死ぬほど悲しかつた。

おぞましさよりも、イサークは悲しくて動搖した。

「こんなのは、嫌だ。

イサークは慟哭した。

じゅと、おなじになりたい。

まだ小さなイサークは、無数の田から涙を流して、田の手足を切り離した。

リュが駆けつけた時、そこはひどい惨状だった。イサークは、人型に変形していた。

だが、それは無残な変形だった。

かるうじて、人の姿に見える残骸であり、かえって人を模倣しているゆえに目を覆いたくなるグロテスクであった。剥き出しのその姿は、醜く、惨たらしかった。

イサークはなんかちがうな、と思ったが、でも、りゅとおなじ、と鏡を覗き込んでいた。

頭はひとつで、腕は一本、脚も一本。頭髪はまばらで、ここのがちがうのかな、と頭をひねっていた。

そして、背後に、顔面蒼白となつて、紙よりも白く血の氣を失つたリュの表情と鏡に映る己の姿を比較して、

ぜんぜん、ちがう

と天啓的に悟つたのである。

突如イサークを羞恥が襲つた。

見られたくない、と強烈な衝動が突き上げた。

『こつち、みるな!』

イサークは喚いた。

安定性の悪い一本脚で、転げそうになりながら慌ててカーテンを自分の身体に巻きつけた。彼は震えていた。

ちがう、ちがう、こんなのはぜんぜんちがう。

見られたくない。

アメーバやイソギンチャク様だった時よりも、もつと酷く、リュと「己」の相違を突きつけられた気がした。

悲しくて惨めで恥ずかしくてイサークは混乱していた。

そのイサークを、巻きつけたカーテン」と、一本の腕がそつと抱きしめた。

驚き身が竦み、イサークは顔を上げることができなかつた。

無数の目の時と違ひ、顔を伏せてしまえば、視覚は狭く制限された。人もどきになつてたつたひとつだけ、よかつたことだ。

イサーク、と吐息がこぼれおち、彼はその甘さに一瞬酩酊した。

「どうした？ 急に人化したくなつたのか？」

覗き込まれ、耳に柔らかい言葉で問いかけられる。

「はじめてにしてはとても上手にできているが、あれは不定形種にとってはなかなか難しい。とても痛かつただろう？ 痛いのに我慢したのか？ えらい子だ」

白い指先がまばらな頭髪を梳いて、頬を辿る。

イサークはじつと下を見つめていたが、何度も頬を撫でる白い手に、おずおずと視線を上げた。

リュが心配そうに自分を見ていた。

「ごめんな、周囲に人型が多いから、同じになりたかつたんだな。世話役が人型の私だし……魔族にはいろんな形のものがいるから、無理に人型になる必要はないんだよ。明日には、人型以外の連中を連れてきてやるう。もちろん、お前が人化したいなら妨げるものではないよ。手伝うから、安心しなさい。でも、急ぐ必要はない。急いで大きくならなくてもいい。急がなくていいんだ。ゆっくりでいい

それに、トリュは伏臥がちにして、口の端を持ち上げた。

「私は、お前の普段の姿もとても好きだよ」

イサークはますます俯き、無理やり人型に留めていた姿を解いた。それは、不自然に折りたまれた四肢を思い切り伸ばすのにも似ていた。

イソギンチャク様となつた彼は、床の上にもそもそと蠢き、恥じ入るように縮こまつた。

「……おいで」

膝をついたままかけられた声は優しく、保護者然としていて、イサークはもやもやとしたが結局逆らうことができなかつた。

更に彼はそもそもそと緩慢な動きでリュの膝上に乗り上げると、居心地悪そうに蠢動し、やがて小さく丸まつた。

認めざるを得ない。

彼の本来の形質にはなく、まだ『早過ぎた』人の姿より、この原型はずいぶん楽であった。

人の似姿は、いざれは彼の設計図に書き加えらるべき姿であり、彼の望みは選択圧となつて望む方向に「デザインされる」だろつ。

しかし、まだ『早い』。

そう、恐らくまだ何もかもが。

イサークには自身の望みの在り処さえ分からずにはいる。

ただ、リュにゆっくりと撫でられて、彼は力を抜いた。

彼本来の残虐で破壊衝動へと向かうその本質は、慰撫され、別もので満たされてた。

きつとそのままでいれば、彼もリュも幸せだつただろつ。

満たされても満たされない。

欲望は大きく育つ。

寄生する怪物のようだ。

怪物は本当に怪物になってしまうだろう。

イサークは怪物を内側に飼っている。

それが大きく育つまで。

彼を内側から食い破る口が来るまで。

いくつの夜と朝を。

でも今は、膝上でまどろむ彼はその欲望の行き着く先も知らない。
だから、それは一幅の幸せな光景に過ぎなかった。

ちよつと夢見が悪いと思つたら現実の方がアレだつた件について

生温かい液体を浴び、リコは呆然としながら、意識が暗くなるのを感じた。

いけない、と思つのに、どうして逆らえない強烈な衝動だつた。ショックだから？

それもあるだろ？

だが、それ以上に、せつと『予定調和』の異臭がした。

小さな姪が、近所の男の子に苛められて泣きながら帰つてきた。

「男の子なんてだいつせいかー！ 監視えりやえぱいのー。」

ぐじぐじと皿をこすりながら言つのだ、【わたし】は、「でも男の子と女の子がない」と、赤ちゃんが生まれないよ？ 唯も、お父さんとお母さんがないと生まれなかつたんだぞ？」と適当になだめようとしたのだが、かえつて猛反発を食らつた。

「お父さんこなくとも、お母さんがいればいいんだもん！ お母さんが生んでくれたんだもん！」

いやまあ。

確かにやうではあるけれど……えーと……他に言葉を重ねてみたが、子供だと思つて侮るもんじやない。

いい加減な説明はかえつて姪を怒らせ、諭破されたばかりだった。
これはいけない、と私は腰を据えて説明することにした。
日本庭園は緑に濡れ、築山山水に滲む季節の色、点々と飛び石が
散らばる。

獅子齧しが、かこん、と音を立てた。
外は平和なのにな、と横田に庭園を見やりながら、まずは席を
立つと茶菓子の準備をする。

熱い茶を注いでやりながら、私は姪にこきなり遺伝子の話から始
めてしまった。

不器用なんです、勘弁してください。

「ええっとな、唯。お前の髪は黒くて、田も黒い。顔はお父さん似
だが、性格はお母さん似だと言われるな? これはね、お前の姿か
たち性質に現れる【形質】とこいつ

「けーしつ?」

「やう、形質だ。」の形質を決定づけるものが、遺伝子だと思えば
いい。いいかい、お前のこの肌

つんつん、とほっぺをついついやる。姪はくすぐつたがつて、ひ
つくつ返りそうになつた。

「」の肌をとつても高性能な顕微鏡で覗いてみよう。するとね、こ
ーなつてこーなつて、こーんな細胞がいーつぱい並んでいて、唯が
出来ているんだよ」

私はチラシの裏に を描いた。これ、細胞のつもりなんだ、察し
てください。

と思つたら、早速姪からブーイング食らつた。

「えーつ、四角じゃん!」

「うん、これはモーテルだけビ、」の四角を細胞としよ。すべての生物は細胞でできているんだよ。つまり、私達は細胞の集合体だといえるね」

「細胞の集合体……」

「この細胞の中には、エネルギーを作り出すミトコンドリアやたんぱく質を作るリボソームといった器官が入っている。この中で、私たちが生きていぐのに必要な様々なタンパク質が作られ、唯の身体を作っているんだ」

「ふうーん」

大雑把過ぎる話でも難しいかな、と思つたが、姪は膝を正して真剣に四角を見つめていた。

「さて、四角の中にひとつ、まるを描いてみよ。」これは【核】だ
「あ、私これ知つてゐる。DNAでしょ」

「うんうん、我が姪は賢いなあ。まあ昨今、なんでもDNAという言葉が乱舞しているからな。

「そつ。」の核の中には、唯の【形質】を決める遺伝子情報の書かれたDNAがあるんだ。遺伝子というのは、細胞や親子間で伝えられていく形質の因子のことだね。遺伝子が書かれたものがDNAだ。DNAがどんな形をしているか知つていてるかい?」

「あ、テレビで見たことがある。一重らせんでしょ?」

「よく知つてるね。そうだよ、一本の鎖がお互いに絡み合つた形をしている。これは暗号テープみたいなものでね、遺伝子情報がゼーんぶ暗号で書かれている

「暗号ーー!?」

「やつ。暗号。暗号は全部で4文字ある

「つむむ、話がなんだかずれてきたが、暗号の言葉に姪が田をキラキラさせてるので、私は脱線を許すこととした。ところどころ、

「暗号四文字すべくな」

早速再びブーリングをもらってしまった。

「うん、少ないけれど、これはね、A、T、G、Cの四文字から出来ていて、これを塩基とこづ」

私はわざわざと手帳の裏に四つの文字を書きつけた。

A アデニン
T チミン
G グアニン
C シトシン

「この塩基の二文字組み合わせてひとつの一文字を作ることだ。二つの塩基による暗号のことを【コドン】とこづね」

「「じん? 二文字で暗号になるの? えっと、いくつできるかな……あ、分かった。4種類あるから、 $4 \times 4 \times 4$ で、64とおりの組み合わせができるね。例えばA-T-Gとか?」

姪、下手すると私より賢い……と田が遠くなりながら、私は話を続けた。

「そうだよ。DNAテープ上の二つの塩基による暗号、すなわちコドンは、それぞれタンパク質の元になるアミノ酸を指定している。ATGならMetというアミノ酸だ。ただし、実はアミノ酸は二十種類しかないので、この64通りの組み合わせは、重複した暗号と

なり、同じアミノ酸を指定していることもあるんだ」

どんどん脱線しているので、そろそろ元に戻して、これもひとつ[の](#)ワクターではあるか。

開始コドンの話までするかなあ？

少し頭を悩ませていると、姪は考え続けて、自分の中で整理を始めたようだ。

「ありすちゃん、ちょっと待つてね。えっと、えっとと。細胞の中に核があつて、核の中にDNAがあつて、DNAつていうテープの中に暗号が書かれていて、この暗号は塩基つていうATGCの四文字でできている。三つの塩基で一つのコドンを作っているんだよね？このコドンが、一十種類のアミノ酸を指定していて、アミノ酸はたんぱく質の元なんだよね？」

「そうそう。賢いなーおばちゃんへこむわ」

「え？ なんで？」

「なんでもないよ。そう、でね。DNAはとっても大切な情報だから、外には出ないんだ。代わりに、mRNA（メッセンジャーRNA）つていうDNAのコピー屋さんが、とってもとってもながーいDNAのテープから、一部分だけ転写して核の外に持ち出しするんだよ。するとタンパク質工場のリボソームつてところにこの情報を持つていつて、暗号を翻訳してタンパク質を作るつてわけ」

ウラシル
Uやプラスマイナス鎖、ヌクレオチド単位、tRNA（トランスマーエRNA）、40Sサブユニットだのなんだの話はまた今度いいわ……

私は茶を啜つた。

「いってみれば、DNAというのは、遺伝子情報の暗号鎖であり、タンパク質の設計図をたくさん収めた大きな【図書館】ともいえる

ね。その大切な設計図を mRNA は転写して工場まで持っていくといつわけだ」

さて、と私は再び喉を潤した。

「おおやうぱにじつと、私達は DNA RNA タンパク質の流れでその集合体を作つて生きているともいえるね。さうくばらんにいうと、この一連の流れを【セントラルドグマ】といふんだよ」

「かけー」

女の子がそうこう言葉使いをするんじゃありません、とは私も散々言われたのでなんとも言いがたい。

「なんだかずいぶん話がそれちやつたな。ちゅつと元に戻すよ。最初に DNA は一重らせん構造だつて話をちゅつとしたけれどね。これは塩基がこうこう風になつてこる」

A - T
G - C

「何これ？」

「一本の鎖はね、必ず同じ組み合せで互いに連結しているんだ。この繰り返しでテープは出来てこる。さつき言つた暗号だね。その組み合せは、A は T と、G は C と塩基が対になるようになつている。何故か分かるかな？」

唯は腕組してうーんと考へ込んだ。

「唯、ヒントだ。細胞は分裂するよ。分裂する時、鎖はどうなつちやうかな？」

「ああーっ分かった。細胞分裂する時に、かたつぽずつ別れるんだーー！」

「うーん、半分正解かな？ 一本ずつになっちゃつたら、次に分裂する時もうないよ？」

「えつと……じゃあ、分裂する時にもつ一本作るのかな？ あ、分かつた！ 必ず塩基が対になつてゐることば、一本ずつ別れた時に、AはT、GはCのペアを複製すれば元通りになるよー！」

賢すぎるぜ、我が姪……

私は内心引きつる思いだつた。

「そう。つまりね、鎖が別れても、元の鎖を鑄型にもう一本複製すれば、最初の一重螺旋型に再生できるの。これが生命の単純にして美しい構造つてわけだなあ」

うんうん、と私は頷いてしまつた。

「ところで、先ほど話した細胞分裂はね、【体細胞分裂】という。これを繰り返すことによつて私達の身体は保たれているんだ」

「なんかその言い方だと他にも分裂に種類がありそうだなあ」

「ご賢察のとおり。【減数分裂】という特殊な分裂がある。私達のDNAは、引き伸ばすととっても長くて核の中に納まりきらないので、ボールに巻きつけては折りたたんで保管されており、これを染色体という。染色体は23対、46本あつてね。23本はお父さんからもらつて、もう23本はお母さんからもらつたものなさ。体細胞分裂では、これがいつも倍に複写されて、それぞれの細胞に分かれて入つていくから、元と同じ数になるんだよ」

「ふーん。減数分裂つてことは、逆に減るのかな？」

「そう。これはちょっと何か動画でも作らないと難しいかな。まあ、とりあえず染色体は元の数にならずに、ランダムに分かれて半

数の染色体を持つ細胞ができるんだ。なんかとくとく、染色体の数が元のままだったら、お父さんとお母さんからそれぞれ染色体をもらつたら、倍になっちゃうよね？」

「46本だもんね。あ、そつか。23本ずつお父さんとお母さんからもらひうから、予め染色体の数を減らしておく必要があるんだ……」

思わず姪の頭を撫でてしまった。

「さて、考えてごらん。体細胞分裂のよつに同じ細胞を複製していくのは、ある意味一人でできるからコストがかからない。こういう生物はね、実際にいるし、極悪な環境下では一匹で増殖することも可能だ。でも、私達はわざわざ雄と雌に別れて何故生殖するんだろうね？ 雌が一人で分裂すれば、相手を探したり、増殖に貢献しない無駄飯食いを養つたりするコストがかからない。でもどうしてわざわざ子供を生むこともできない、生物界において多くは子育てに参加もしない、増殖のお荷物になつてしまつ穀潰しの雄なんて性を作つてしまつたんだろう？」

いやほや、思わず顔がにぢにぢしてしまつ。

「さあ、考えてみて」

答えは簡単。

減数分裂による配偶子は、ヒトの染色体数は23対あることから、 2×23 乗 = 8 - 388 - 608 通り生じることとなる。

そして雄というファクターと有性生殖を行えば、8 - 388 - 608 通りの2乗 = 70 - 368 - 744 - 177 - 664通りの次世代が生じる可能性があるので。

そう。

眩暈のするような数字。

遺伝子のプール。

世界中で有性生殖が行われ、私達は36億年も昔に、『遺伝子のかき混ぜ（シャッフル）』といつ船に乗つてこの大海に乗り出すことを選択した。

そうしなければならないからだ。

私達は。

そう。

『その場にとどまるためには、全力で走り続けなければならない（It takes all the running you can do, to keep in the same place.）』

の国のアリス ルイス・キャロル

『鏡

田覚めた時、リュは、吐き気と眩暈とともに、見たくもない顔に覗き込まれて、危うく嫌悪を表に出すところだった。

「よかつた、田が覚めたんだな！」

かなりの距離の近さで満面の笑顔とともに、花守刹那とやらが彼女の手を握っていたからである。

（リリは ）

田に、どこまでも白いイメージの部屋。高価な調度品は、繊細極まりない金細工で化粧を施され、遮光カーテンがはたとひらめき、突き抜けんばかりの青空が広がっている。

空気が薄い。

明度が高い。

（ああ、リリは ）

「リリは、白龍城だよー。」

そろそろ泣いてもいい頃ですか、トリュは自分が死んだ魚の田をしているだらうことを確信した。

ちょっと夢見が悪いと思つたら現実の方がアレだった件について（後書き）

高校生レベルの遺伝子講座、一部伏せたり例えのため捻じ曲げた部分がありますので、ご了承ください。

ただしイケメンに限るがこの地域の法律です

自分は呪われているのではなかろうか、とリュは真剣に思案したくなつた。

だが、その前に、考へるべきことは山ほどあつた。

（そりだ、まずは一体【あの後】どうな ）

そこまで思ひ巡らして、リュは咄嗟に無理やり情動をねじ伏せた。ねじ伏せたにも関わらず、動搖は顔色に現れ、血の氣を引かせていた。

「大丈夫か！？ 気分悪い？」

心配し、慌てふためく声色から、決して悪い人物ではないのだろうと思つた。

奇妙な言い回しだが、憎むに値すらしない善良な人間。

ただ、彼を取り巻く何かが、常軌を逸脱しているのが問題なのだ。

（扱いやすいかもしけぬが、かえつてその善良さゆえにトラブルメイカーかもしれん、可能性は常に念頭におかねば……）

本当に気分が悪かつたのではあるが、あえてそれを隠さず、リュはするりと握られた手を抜いて口元を覆い、『体調が悪いです』とあからさまな演出をしながら頭を回転させていた。

リュ自身に、高貴なる者の義務とやらが適用されるのか、魔族の生態を鑑みるに甚だ疑問を呈するところではある。

しかし、少なくともヒト族の王侯貴族であれば、敵地において身

内の詫報に心を揺らして隙や弱みを見せるなどといふことは、まあ侮蔑されてしかるべき醜態であろう。

（そ、う。少なくとも、私は何があつたのか、分かつていない
イサークは自分の力をほとんど使いこなせていなかつたが、そんな
簡単に滅びるはずが でも、バランスブレイカーはこの世界の律
とは別の存在、常識が通じないだらう。まさか本当に……いや、こ
こが白竜城であれば、何のけはいも感じられないし、通信手段すら
ない。だから、不確定なことで嘆き悲しむのは恐ろしく無駄で何一
ついいことなどない）

リュにできる一番のことは、ボロを出さずに、速やかにこの城から脱出し、味方に連絡を取ること。

貪欲公は恐らくこれまでにない『異変』に、彼女いわく『戦略的
撤退』『背後への前進』を選んだことだらう。

それは正しい。

正しいが、彼女が何をやらかすかが、リュの心胆を寒からしめて
いる。

自分を理由に、全面戦争だけは本当に『勘弁ください』、とリュは
何か上位の存在に神頼みで土下座したくなる。

（いや、それはないつ、きっとない！ 弱さが罪の世界だ！ 自己
責任だし！ 身内が滅ぼされてもメルキオラ公とかふつつーに勝者
を褒め称えるくらいだし！ そうなるとイサークがもし生きていた
ら逆におおおおおつそろしいことになるではないかつ、あれの思
考形態は割と身内認定がヒト種寄りだし、ダメージから回復した後
は、普通に領空侵犯の上本拠地侵入、奪還にやつてきて無茶苦茶に
……せせせ戦争ではないかーつ！？ 死ぬつ、本気で死ぬ！ 生き
てる場合の最悪の事態も想定して、早くここから脱出した方がいい）

苦しそうなふりをしながら、実際にリュは今後考えうる展開に、胃の辺りが本気で痛んで来て冷や汗をかきつつ苦悶した。

（まずはあの後何があつたか情報収集。それから速やかに撤退。優先順位は後者とする）

何事も、命あつてのものだねだ。

それまで、ひとまずイサークの生死については頭から追い出す。ただできることをするだけだ。

それが最短の道。

「ごめんなさい、あの後何があつたのか、分からなくて、ただ気分が悪くなってしまって」

弱弱しさすら装つてリュが面を上げると、大変刹那の顔が近くにあつた。

思わず顔面が固まって仰け反りそうになるが、必死にこらえる。

（ちけーよ、少年！）

前世の「己」が蘇り、内心言葉遣いが乱れるが、それも仕方ないと許してしまって、そのままほどの至近距離だ。

親子でも、よほど小さな頃でなければこの距離はないだろう。夫婦や恋人なら別であるが、刹那とリュはいわば赤の他人であり、潜在的には究極の敵でもある。

刹那はリュの目をまっすぐに見つめ、じりやつてもありえぬ近さで、破顔した。

「あんな目にあつたら誰でも気分悪くなるよ。大丈夫、恥ずかしがらぬともいいよ」

ああ、なるほど、ヒュウは合点した。

冒険者と名乗ったし、確かにグロテスクな光景に気を失つてどうのは、本当に酷い醜態だ。

ヒュウが真実冒険者であつても、そんな軟弱な奴は仲間にしたくな
い。

おととこきやがれである。

「……お恥ずかしいところを」

頬を染めて視線を反らすと、この辺をやつてのけながら、ヒュウは
別のことを考える。

（だが、アレはショックで昏倒とこいつが当をやつてのけながら、ヒュウは
似ていた　私は何の【影響】を受けたんだ？）

危機的状況と判断されたため、直前にナビと強制リンクされ、情
報が次々と入つてきた。

刹那の妹である紫桜音が、世界法則じよつけいをぶつ飛ばす勢いであらゆる
加護守護恩寵かごしゆごおんのうを受けており、敵性存在からの攻撃をオートマチック
に迎撃破壊する機能を持つていては嫌というほど確認できてしまつた。

あの自動迎撃にヒュウもまた巻き込まれてしまつたのだろうか？

（しかし、単純に攻撃力カンストつてレベルじゃないぞ、あれは：
・対属性で200パーセントダメージというより、1000パーセ
ントダメージという感じだつたな……イサークはもうに混沌（Ch
aos）・邪悪（Dark）の暗黒破壊属性だから、多分あの娘は
法と秩序（Law）・善（Light）の光輝属性の加護で……相
性悪すぎるだらうね……）

しかも、攻撃力より遙かに恐ろしいのが、マインドコントロール系の能力だ。

強力な魅力効果。
チャーム

チャームは、夢魔系も駆使するところだが、あくまで一時的な効果で、これも状態異常魔法の一種である。

しかし、これが究極の溺愛補正（あめないゆめ）と来たものだ。

解析によれば、Law属性はもつともこの効果を受けやすい。

逆に、Chaos属性はレジストする可能性もあり、イサークはレジストした

（攻撃してきた敵性存在がレジストに成功し、だから徹底的に破壊された 何か引っかかるな ）

あまりにも、庇護対象の性質と、それはかけ離れているのではないか、という考えが泡立ちのよつに浮き上がる。

無論、リュも紫桜音という少女の性格や嗜好をほとんど知るよしもないのだが、兄である刹那を見ても、無茶苦茶にかけ離れた反社会的性質を宿しているとは到底考えがたい。

大体、それなら彼女はイサークと同じ属性になってしまつだろう。言葉少なに思考の海に沈んでいたためか、刹那は何か彼の中で推しはかるものがあつたらしい。

いきなり。

ぽん、と頭に手を乗せられた。

（……は？）

あやつくココは口に出しかけたそれを、ぐつと呑み込んだ。
ぽん、ぽん、と立て続けに頭を柔らかに叩かれ、髪を撫でられた

からだ。

リュが子供ならよかつただろう。

しかし、リュはどこからどうみてもヒト型の成人女性である。

初対面で、いきなり頭を撫でる行為を、世の女性陣は普通に「ナニこの勘違い男キモイ」と称するだろう。ただしイケメンを除く、と言つかもしれぬが、リュはイケメンだらうがなんだらうが、勝手に身体を触られるのは好きではない。

淫魔族ではあるが、その性質には目を背け続けているリュではればこそ、嫌悪もひときわかない。

不可抗力ならともかく、何故この場面で頭を撫でようという結論に陥つたのか、そもそもそれを妄想にどぎめず実行するに至ったる思考回路が解せぬ、とリュは口元が引きつりそうになつた。

頭皮は敏感な部分だ。

髪の上を滑る指先の感触は、嫌と言つほど伝わってくる。

(ここなことをして喜ぶ女がいるわけ いるんですね、分かります)

振り払つのではなく、ちよつと、と自然に手の甲でかわそつとしたりュだったが、扉を開けてじいーっと無機質な目で見上げる銀髪オッドアイ幼女と、憮氣で顔を紅潮させるエルフの姫スーリアと、「あらあら」と腹黒い微笑をしている女騎士カタリナ、不機嫌そうな狐耳着物娘タマモのメンバーに、常識とはとこひにようけり、と固まつた。

幼女がとてとてとやつてきて、「ん」と頭を刹那に向かつて差し出した。

きよとん、と刹那は目を見開いて固まつていたが、リュは助け舟を出してやつた。

「頭を撫でて欲しいよつですよ」

自分から望んでのこと、決して人身御供ではない。

刹那は「あ、なるほど」と笑い、リュの髪を一撫でして、今度は幼女の銀髪を撫で撫でと触る。

リュの内側を不快を通り越して怒りのような衝動が突き抜けたが、それをこのメンバーの前で表に出すほど思慮に欠ける行為はないだろう。

女性陣がそれぞれに表現しながら、我も我もと群がる様子に、リュはどこか他人事であるかのようなそれと、同時に恐れにも似た感覚に身体を震わせた。

バルドウインの時も感じたのだが、彼女達のプライオリティが何よりも刹那になってしまい、周囲への配慮が見られない。元からの性質なら残念な人たちで済むが、そうでない場合 あらゆる意味で脅威だろう。

(溺愛補正とやらが、好意を植えつけるのみならず、理性や思考を霞ががらせるものであれば、それは本来の人格といえるだろうか?)

それは人格の消失に等しいのではないだろうか。

厄介な、とリュが目を眇めた時、新たに闖入者があつた。

何でもよいが、皆ノックしようよ、とリュは思つたが、白竜族においてはこれが常態であれば、郷に入つては郷に従えということだな、とリュはすでに諦めていた。

「刹那！ リュさんは目覚めた ！？ 精霊が騒いでいて あ！」

飛び込んできたのは、息を弾ませ、頬を紅潮させた紫桜音だつた。彼女は寝台に上半身を起こしたリュと目があうと、へなへなとその場に座り込んだ。

「よかつたあ。田が覚めたんだね」

大きな目が安堵の涙に潤む。彼女は田をこすると、ぱんぱんと裾を払い、立ち上がりてリュの傍までやってきた。

そのまま呆然と見上げるリュの前でこめつけられたのよつておじぎし、ひたすら謝罪した。

「う、ごめんなさい。私を守ってくれる精霊たちが暴走して 竜神さまも怒っちゃって、全力で攻撃しちゃったみたいなの。リュさんのこと、全然考えずに力をふるって、私叱つておいたから！ ゴめんね、びっくりしたよね。怖かつたよね。私も怖くて、怪物に襲われて、恐怖に負けちゃって、それで」

「馬鹿、紫桜音、落ち着けって」

「うん、と刹那が軽く手の甲で暴走しがちな妹の頭を叩いた。

「あ、う、うん。すーはー、すーはー」

息を吸つて吐き出し、「お前それで落ち着いたつもりかよ」と刹那の突込みを受けながら、彼女は「よし！」と気合を入れた。

「リュさん、本当にごめんなさい！ それで、身体の調子はどう？ つらいところはない！？」

「い、いえ。大丈夫です。それより、状況がつかめなくて、あの後一体何が？ そもそも私は何故ここに？」

「えつ、刹那何も説明してないの！？ 何してたの！？」

詰め寄る彼女に、リュは「いえ」と遮る。

「私がしばらく具合が悪かったので、落ち着くまで話ができなかつ

たのです

「え、そつだつたんだ。で、でも、具合が悪いって」

責める紫桜音に、リュは微笑んでみせた。

「今は大丈夫ですので、よければ事情を教えていただけないでしょうか？ 協会への報告がありますので助かります」

「う、うん。それなら……えっと、あの後リュさんが氣絶して、襲ってきた魔物は竜神さま　あ、私の守護をしてくれている神さまなんだけれど、竜神さまと精靈王たちがやつつけてくれて」

微笑が凍りつきそうになる。だが、リュは静かに頷いて先を促した。

「で。でもね。あの魔物凄く再生力が強くて、皆がやつつけてくれても何度も再生するから、本当に怖くて」

思い出したのか、ひっく、と紫桜音が喉を鳴らし、鼻を啜り上げた。その肩を刹那がそっと抱く。

「「」、「めんなさい。あんな怖い、気持ち悪い魔物初めてだつたら……」

聞きたくない、と脳の片隅で別のリュが騒いでいる。でもリュはその自分を容易に押し潰した。

聞かねばならない。

何しろ、本人の証言など、ここから去つてしまえば、生で聞く機会などそつそうないだろつ。

貴重な機会なのだ。

紫桜音は、人差し指で涙を拭うと、にこりとけなげに笑つてみせ

た。

「でも、みんなで力を合わせて、やっと倒したんだよ。だからリュさんも安心してね」

リュは無表情になる代わりに、微笑を面に張り付かせたまま尋ねた。その手はシーツを強くつかんで白い筋が浮き上がる。

「そうですか。よかつた。それでその強い魔物の死骸は？ もう再生しなくなつたのですか？」

ええつと、と紫桜音は氣まずそうな顔をした。刹那の方を見やる。刹那もまた少し困つたように空中に視線をさまよわせたが、決意したのか、励ますようリュの手を握つた。彼の背後で何か悲鳴に似た声が上がるが、彼の耳には聞こえなかつたようだ。

「こんなことこうと怖がらせるかもしけないけれど、あの魔物、何故か再生するたびにリュさんを襲おうとしたんだ。多分、意識を失つてゐる状態で一番弱い者から狙あうとしたんだと思う」

リュは口を開け、喉元にせり上がる熱い塊を必死に飲み下した。

「多分、そういう理由だから、怖がることはなによ。安心していい

要領を得ない。

苛立ちにも似た衝動に手をつきかねた時、

「あのねつ、刹那のいとおりだから、もう大丈夫だからー。えつとね、私、巫女なの。この世界では神子つていわれてるの。えつとね、えつとね」

「だから落ち着けって」

「う、うん。深呼吸、深呼吸」

再び紫桜音は大仰に両腕を開いては閉じ、深く息を吸つて吐き出す。

「私、清めの力を持つてるの。だから」

彼女は何か言つたのだろう。

しかし、リュはうまく聞き取れなかつた。

違う、聞き取ることを拒否したのだ。

この娘は何を言つているのだろう、とリュは目を見開いていた。

そんなこと、許されるわけがない。

「リュさん、すつじぐく顔色悪こみ。じぱりべるの城に滞在するとい
いよ

にぎやかな彼らはその後もあれこれラブコメ真っ青に騒ぎ立てて
いたが、「リュさん顔色悪そうだよ」という紫桜音の言葉と、ちょ
うど彼女を迎えてきた皇太子の登場により、リュ一人を残して彼ら
には立ち去つてもらつた。

部屋はしん、と静まり返つていた。

リュは両手の指を固く組み合わせ、己の額にあてて身体を折り曲
げる。

疑いよつもなく、紫桜音のアライメントは善性だ。無垢だ。

(しかし、実は、無垢には善悪などない。結果は陰惨となつとも、
その性は無垢でしかない。時にその行為は善とされ、逆に悪ともさ
れる。視点移動で砂時計にも似て、上下はその時々により変わる)

善意から出た悲惨。

「 これでは、何の対抗手段もない」

いや、と彼女は否定する。

（少なくとも私自身は【私自身】だ）

リュはイレギュラーかもしれない。だが、もう一人、実例がいる
ではないか。

その時、コソコソ、と扉をノックする音がした。
リュの目が鋭く細まつた。

飲む、打つ、買ひ、の内ひとつ選択せよ

「どうぞ」

ノックに対し促すと、扉が開き、姿を現したのは半ば予測していたバルドウインであった。

彼は、色あせた髪を切らず、髭を剃る事もしなかつたようだ。もさもさと顎鬚や口髭が伸びている。剃つたら意外ともう少し若いかもしれないが、雰囲気自体が何やら哀れを誘う。

憔悴して影のある表情は、どこかくたびれたサラリーマンを演じる聖林映画の野生派ドル箱俳優のようである。

（イケメンは何をやつてもイケメンだつて某俳優好きのユーハーフの外国人の友人が吼えていたなあ）

言語教育関係の講義で知り合つたのだが、生前からオカマとは縁の深いリュである。

彼女（？）のコメントについては、まあ、否定はしない。ともあれ、リュは敵地にあり、バルドウインもまた彼は白竜族の王族である。

氣を緩めてはならない、が。

確かめねばならないことが、お互いあるようだ。

バルドウインは緊張して探るような面持ちで近づいて来た。そのまま何故か自分のつま先に視線を落としてしまう。

「……氣分は」

「もじもじ」とした末に、搾り出したのは途切れがちなご機嫌伺いである。

(「この人は……もしかして無口とこいつより、あれか。『ハリニケーシヨン』苦手なのかなー?」)

何十年も一人で迷宮をさまよい続けねばそつなつても仕方ないとリュも思つのだが、根本的に何か違うオーラが出ている。何かに似てゐるような、とリュは少し首を傾げ、

(「……あ、分かつた! ゴールデンレトリバー! しかも常時しょんぼり系!」)

それで、思わず。リュは顔を背けて、口元に手を当てるとき曇出してしまった。不可抗力であった。がつかり大型犬と思えば、勝手に壁も取り払われてしまいそうになる。

「わ、私は……何かおかしなことをしただらうか……」

指を開いたり閉じたり、更に影を濃くしてしまつ男に、リュは慌てて謝罪した。

「申し訳ありません、あの、ちょっと気が緩んでしまつて。先ほどまでとても賑やかだつたので……」

バルドウイーンの顔に、はつきりと緊張が走つた。彼は絞り出すようによじよじにして問いつ。

「その、気分は? 何か変わつたことは?」

矢継ぎ早に尋ね、目を見開くリュを見て、彼は耐えかねるよう大きな身体を丸めたかに見えた。

顔面を覆い、床に膝をつくと、臓腑の底から吐き出すかのよに彼は謝った。

「申し訳ない」とした。本当に申し訳ない。今の貴女には分からんだろうが、命の恩人をこのよつな「ちょ、ちょっと、待ってください！ 何か早急点されておられませんか？」

ぶつぶつと謝罪を呴き続けていた男は、「は？」と途中で言葉を止めた。

今度果然とリュを見上げたのは彼であった。

「殿下。ここはお互い腹を探り合つても平行線です。正直ベースで参りましょう。私、彼らに法外な好意は持つておりません。具体的には、刹那殿に頭を撫でられて、私の育つた環境では、初対面の女性の髪を触るといった行為は非常識と感じました」

早口に伝えると、バルドウイーンは、ぽかん、と口を開けていた。

「殿下、口を閉じてくださいませんか。腹筋が崩壊いたします」

「あ、ああ、うん。そ、そうだな」

彼の視線はきょろきょろと定まらない。ものすごく動搖している。拳動不審を絵で書いたら、多分この人の姿になる。

（駄目だ、この人……はやくなんとかしないと）

あれだ。

大量に犬を飼っている家の主人が長期出張から帰宅した時、飼い犬たちが主人に殺到していた。

殺到しそびれて、大きなゴールデンレトリバーが彼らの輪に加わりたそうに、物欲しげにうろうろしていた光景を見たことがある。自分の存在を主人に訴えたいけれど、訴えられない不器用な大型犬。

似ている。

似すぎている。

あのしょんぼり感に酷似し過ぎて、胸が痛いレベルである。

「わ、私はてつきり……いや、つまり、このよつなことを言つと頭が狂つていると言われるかもしねないが、その、つまり」

リュは彼の言葉をやえざることなく、頷いて、ゆっくり話して欲しい、と目で訴えた。

男の目に薄い涙の膜が張つたかに見えた。

「……皆が、皆が……」

言葉が続かずに、彼は拳を額に押し当てて、ほとんど寝台の端に顔を埋めるように背を丸め、うめいた。

「正氣なのは、私一人なのかと……こんなことは、狂つている……

シーツに広がる染みに、彼の涙を見るのは一度目だな、とリュは思つた。

バルドウイーンが落ち着くまでは少し時間がかかった。

「申し訳ない、醜態ばかりを晒している」

うな垂れて何度目の謝罪となるのか、大型犬もといバルドウイーングが縮こまつて口にしたが、リュは首を振った。

「いいえ。泣くことができる、ということはよいことだと思います。泣けなくなつたら、そちらの方がきっとよくないでしょ」

リュはあまり話題を引きずるべきではないだらうと判断し、まずは寝台を出て話を進めようとしたのだが、逆にたしなめられてしまつた。

「まだ本調子ではないだらう。気にせずにそのまま話してくれ」「そうですか。では」好意に甘えさせていただきます。でも殿下、せめて椅子に座つてください。私も落ち着きません」

膝をついたままのバルドウイーンは苦笑し、椅子を引いて腰を下ろした。

「まずは、と言いたいところだが、リュ殿。貴女はすぐにでもこの城を出た方がいい。ここは、貴女の思う以上に危険な場所となつてゐる。事情を詳しく説明したいところだが、そもそもいかぬ。ここは私を信じてとまではいわぬが、信を預けて、私の願いを聞いてはくれないだらうか」

真摯であり、リュもまた城を出られるなら諸手を上げてぜひお願ひしたいところではあった。

数時間前なら。

しかし、今は事情が変わつた。

リュは、お言葉はありがたいのですが、と断つた。バルドウイー

ンの顔に絶望がのぼるのを見て、互いに腹を割つて話しましょつ、と再度告げる。

「殿下の懸念の一端、私も理解しております。私は状態異常に関する専門家なのです」

はつ、とバルドウイーンが面を上げるのを確かめ、リュは言葉を続けた。

「この城は いえ、【彼ら】を取り巻く人々の状態、通常ではありません。魅力系魔法は一時的に対象を虜にしますが、永続的なものではありません。あくまで一時状態異常を引き起こすもの。ここで起きていることは、通常ありうべからざること」

リュはまっすぐに男を見詰めた。

「永続的魅了効果。禁術もしくは異界の技。殿下の『懸念はこれでしそうか?』

バルドウイーンはしばし無言であつた。

城の内情として、あまりにもまずすぎる。

他国に漏れでもしたら だが、彼は葛藤の末に『否定しない』ことを選択した。

それで十分だった。

「しかし、殿下は免れ得てゐる。 何故でしようか?」

例えば、とリュは独り言のように口を開いた。

「レジストに成功したのは、元々受容体がないから。私の見立てで

は、アライメントが`Chaos`属性のものは、鍵と鍵穴の関係に例えると、**鍵穴**^{レセプタ}を持つていかない可能性が高い。ただし、鍵は学習し、自在に鍵穴に合わせて形を変えることも予測され、万全ではない現在、`Law`属性である限り、この永続的魅了をレジストする可能性は限りなくゼロに等しいと思います。とすれば、あるいは、すでに、別の『何か』に感染している

いや、ドバルドウイーンは遮った。

彼の口元は皮肉に引きつるよつにして笑いの形に歪んでいる。

「前提条件がすでに間違っている。私は白龍族においては、はみ出しがでね。そのうち、口さがない噂を耳にするだらうから先に言つていこう。私は竜化することもできない出来損ないだ。こんな私も皆は優しくしてくれたがね、まあ一段下を見るように慈悲を差し伸べてくれたわけだ。そしてそんな卑屈なことを考える私のアライメントは、そもそも`Law`属性ですらない。`Law`属性ですらない。私は鍵穴をもつていらないんだ」

次第に俯いてしまう男に、リュは 強烈に頭を撫でたいと思つた。

（『ゴーラデンレトリバー』が、しょんぼりしょんぼりしている……！ し、静まれ私の右腕ええええええええええ……）

思わず左手で右腕を押さえ、苦悶しながら自重した。

（刹那少年と同じレベルになつてしまつではないか……？）

「殿下、通りすがりの旅人ゆえに無責任な発言となりますが、通りすがりゆえに申し上げます。お気になさるな。アライメント`Law`

·Chaosなど、所詮生まれた時に、神々が定めたただの古い判定のようなもの。時に入れ替わり、Light-Darkは特に生き様に左右されるそうですが、そんな簡単に心をラベリングできるものではありません」「

そうだ。

リュの中にも、善があつて悪があり、秩序があつて混沌がある。全て矛盾を孕んで存在するよりないのだ。

そして、そんな四角四面なことは、彼自身も分かっているだろう。「少なくとも 貴方は貴方のままでしよう。魅了系の無残で恐ろしい結末は、本来の人格の阻害、永続の果ては人格の消失です。殿下はこれを見過ごされますか？」

あるいは、その方がよいのかもしない。立ち向かう勇気は美しい。だが、相手を見ずに打ちかかれば、時に無謀の代価はその命だけでは済まないだろう。

そうとすらリュは思いながら、あえて尋ねた。けしかけたのだ。リュもまた皇族であるがゆえに。

「見過ごせるわけがない 例え艱難辛苦の道であろうとも

それが私の義務だ、と彼ははつきり答えた。
だが、リュは念を押すことにした。

「その道が泥の道でも？ 不名誉を被つても？ 人々に罵られ、誤解され、指差されることにならうとも？」

バルドウイーンの目に迷いはなかつた わけではない。
彼はすでに十分罵倒されていたし、冷たい目で見られてもいた。

だから、現実にそれがどれほど辛いことなのか知っていた。

苦しい道に耐えられるか？ 即答する奴なんぞ、信用おけない、
とリュは思う。

迷い、迷つて、だが迷いを振り払わず、意思の力で、その決意で
もつてねじ伏せる。

ならば、信することができる。

彼が頷いてみせた時、リュは笑つた。

「よかつた。では、協力してください。あ、私平和主義の魔族です。
ちなみに皇位継承権は下から数えた方がはやい程度の皇族です」

バルドウイーンの顎が落ちた。

できれば最後まで伏せたかったが、事情が変わった今、魔族であ
ることを伏せていては話が進まない。

これから前提条件なのだから。

博打ではあつたが、少なくともリュは賭けにかつたようである。

壁打したまま固まつたバルドウイーンは、やがてばきばきと右足を落とすのにも似て、次第に身体の硬直を解いた。

「……ついふんあつせつと打ち明けてくれたものだ」

そして、彼は確かに皮肉ともとれる、あるいは心底おかしげに笑つた。

「なるほど。道理で肝がすわり過ぎていると思った。そうか リュ殿、そうか。魔界の宰相であらせられたか」

リュも少し困つたように会釈した。

「いじつて顔をあわせるのは、お初にお目にかかる、と書つべきかもしけませんね」

リュとバルドウイーンは直接に顔を会わせたのは、ダンジョン内が初である。

しかし、書簡でやり取りしたことはある。

魔界宰相、とは要するに外界からの苦情窓口であり、内政においては何でも屋程度の扱いである。

魔界の事情を舐めてはいけない。

学級崩壊しているクラスで、押し付けられた委員長レベルのそれである。実際、魔界に組織立てといふものはこれまで一切なかつた。個々に単独にそれぞれに活動する彼らは、上下関係といふのはあくまでパワーによるものでしかない。

名にこそが、つまり名譽こそが彼らの全てなのである。

その頂点に立つのが魔王。下克上は獎励されてしかるべきものであり、切磋琢磨とは聞こえがいいが、年中鬭争に明け暮れていいく汗流している、それが魔族。

ついでに、国外にも「俺より強い奴を探しに行く！」とはた迷惑な侵略行為を繰り返す。それが魔族クオリティ。

無論リュは泣いた。

とりあえず、苦肉の策で、リュは定期的に天下一武会ならぬ魔界一武道会を開催することを上申し、御前会議にて満場一致賛同された。

ノリノリに喝采し、ブラボーブラボー絶叫する彼らの姿、瞼の裏に焼きついて離れぬ、とリュはいまだに遠くを見つめたくなる。

この意図は、公的なイベント実施によるガス抜きである。

魔界はこれのおかげで、ずいぶん落ち着いた リュは積極的に外交にも精を出した。

ネガティブキヤンペーンを張るだけ張りまくつてきた過去の所業、拭うためには別方面のアピールが欠かせぬ。

魔界一武道会またの名を魔界トーナメントにも、国外から選手を招致し、観客すら呼び寄せた。近年は王侯貴族が照覧に訪れるほどである。

裏どころか表で大金も動いている。

通常では見られない娯楽に、退屈を持て余した連中の食指が動き、付随してヒト・モノ・力ネが動く。

魔界もある程度外に開かれるようになつた。

とはいって、魔族〃とんでもねえ奴らのレッテルはいまだ完全に払拭できていない。しかもあながち間違つていないとこらが、リュに心の汗を流させる第一要因である。

特に世界警察を標榜する白竜族には、疑いどころか汚物のような目で見られていることをリュは重々承知している。

彼らとのやり取りにどれほど気を使つたことか！

かつての世界大戦勃発秒読み開始前ほどの緊張感は取り払われた

ものの、ココがここにこなじませ、まあもつて非常にまことに事態で
ああいへ。

もちろん、勝手につれてこられたわけだし、皇太子も経緯は白ら
采配してこるから、不法入国だのと騒ぎ立てることはできない
はずだ。

暴露されても国交問題になることはないだろうが、あまりおおつ
ひらにしたくはない。

また、彼らも天井知らずのプライドゆえに、皇太子由ら魔族を白
竜城に引き入れた、という事実は明るみに晒したくはないだろう。
一番いいのは、お互いに『魔族の皇女はここに来ていない、うつ
かりお持ち帰りしていない』という暗黙の了解に落としどころをつ
けてしまふことだ。

こうした微妙な調整というのを、白竜族は実務として誰が引き受
けているか、というと。

バルドウイーン王子なのであった。

白竜族において、魔界側とのやり取りは、汚らわしいと唾棄され
るべきものであり、つまり 汚れ役である。

誰も進んでやりたがるものではない。

王族級の名がいる時、第一王子のバルドウイーンが貪り籠を引か
されていたというより、自ら買って出た。

すなわち、一人は初対面でありますながら、初対面ではなく、ある意
味旧知の仲であった。

ただし、顔合わせをしたことはないのだ。

何しろ、白竜族は絶対に魔界領土に足を踏み入れない。
魔族を彼らの領土に入れることも忌避している。

リュは多くの書簡のやり取りを各国としているが、恫喝まがいの
それに白竜族扱いすれえええ！ と思いつつも、具体的の話を進める
際は、実務担当者は話が分かるなあ、といつもありがたく心中頭を
下げていた。

恐らくバルドウイーンがいなければ、一、二回は白竜族と魔族側

の戦争が勃発していたと思われる。

白龍族は頭に血がのぼった結果として。

魔族側は通常運転仕様の闘争本能により嬉々として。

「どうにも 驚かされる」とばかりだ、いや」

口調を改めようとするバルドウイーンにリュはこれまでどおりにお願いしたいと言い、一人は改めてそれぞれに情報をお互い交換することとした。

「 では、刹那殿たちは、なにがしか目的を持つてこちらに召喚されたというのですね？」

リュの言葉に、バルドウイーンは頷いた。

「ああ。彼らの話では、【星図】を完成させることが第一の目的らしい。それを完成させることによって、この先訪れる過酷な運命を覆すことができるという。彼らは神が遣わした神子であり、救世主である、と我が國も認めている。我らの龍神が告げ、紫桜音をその神子あるいは花嫁として恩寵を与えているためだ。刹那殿も含め、聖獣、四大精霊から祝福を受け、彼らはあるゆる「awakening」の加護を得ている」

「【星図】 先に訪れる過酷な運命？」

鸚鵡返ししたリュにバルドウイーンは眉根を寄せた。

「恐らく、彼らの話ぶりでは、【星図】は彼らにとってのキーパーソンの魅了だと思う。彼らの操る不思議な薄い箱か鏡のよつた物体があるのだが、そこに魅了する相手の名前が浮き上がり、【好感度】を最大まで上げることで何か力を手に入れられるようだ。度々【攻

【略】【ルート】【フラグ】【好感度MAX】【イベント】などと言っていた。私には多々分からることもあるが、むしろ分からぬふりをして色々聞き耳を立てたし、彼らは一人とも頓着せずに会話していたからな」

リュは、思わず、額を押さえてうめいた。

「 異世界恋愛シミュレーションゲームが、おー……」

ちょっとそこまで露骨とは思わんかったぞ、世界システム……と両手をつきたくなる。

誰が設計した、誰が！ 責任者出て来い！……と彼女は叫びたかった。

いや、分かりやすくてありがとうございます、といふべきなのか。

（だとすれば、【星図】とは、攻略リストみたいなものか？ 全部埋められたら私のジ・Hンドか！？ しかも【イベント】！？ 嫌な予感しかせぬ！ あれだな！ きっと魔界大戦とかあるんだろうな！ 悲劇展開はさぞおいしかろうな！ パラメータの予測線上下を見るに、結論として死ぬ！ どうせ私は立場的に噛ませだらう、死ねということだな！ しかし死なんぞ、ナビがいる以上、私は彼があちこちで観測したという【わたし】のように盲田ではない。フラグは全部叩き折る！… 勝てば盲軍！… 勝てば盲軍！… 勝てば盲軍！…）

呪い紛いの自己ドーピングをして、リュはきつと面を上げた。先ほどの『異世界恋愛シミュレーションゲーム』との言葉に、頭をひねっていたバルドウイーンは、リュの据わった田に、びくつと椅子の背に張り付いた。

「おや、うー、【イベント】といつのは、【好感度】を上げるだけではなく、大きな彼らの物語の進行に伴い、ターニングポイントとして配置されているでしょう。とりあえず「これ以上の悪化は 阻止します」

「あ、ああ。しかし、何をどうやって」

「彼らのやりたいことを片っ端から邪魔します。最終的には、思い通りにならぬことによって、この世界を逃避せます。血ちりお帰りいただくのです」

リュは言葉を重ねた。

「バルドウイーン殿、貴方の懸念を教えてください。貴方が一人迷宮に追放されたわけを。考えられるとすれば、貴方は恐らく攻略対象であつたはず。なのに、追放された つまり対象を外れたということ? 攻略対象は固定ではなく、随時入れ替わっているのではないでしょ? うか。大切なのは数なのかもしれません。あるいは、必修と選択があるかもしれません。分からぬことだけですが、少なくとも貴方は不要とされた。邪魔とされたのです。おそらく、貴方はイベントの進行を妨げたのです。だから弾き出された」

バルドウイーンの顔から血の気が引いていた。

彼は膝上に指を固く組み合わせる。

「 リュ殿。貴方は精靈といつ存在をどう思つ?..」

口を開いた彼は、的外れなことを言い出したかに見えたが、そうではないとリュには分かった。

本題なのだ。

答えを間違えてはならぬ。

「精靈、ですか。よく刹那殿たちが口にしますね。正直に言えれば、自然の代弁者、自然のアーマ、火、水、土、風に代表される元素の具現化」

そこまで口にして、リュは口端を吊り上げた。

「とは全く思いませんね」

バルドウイーンが目を瞬かせる。彼の肩から目に見えて力が抜けた。

つまり、正解だ。

「連中自身はそう思つてゐるかもしだませんが、彼らもまた生物の一種に過ぎない。水中や土中に環境適応してゐる生物がいるのと同様に、彼らもまたひとつの異種であると思います。進化の中で、あのような種に別れた我らの同類と言えるでしょう。だから自然の代弁者と名乗るのは、要するに一種の選民思想ですね」

それに私は、どこからでも無粋にスパイされるのは好きではありません、とリュは締めくくつた。

バルドウイーンといえば、呆れたようにリュを眺め、それからくつくつと肩を揺らした。

「やはり貴女も魔族なのだらう。過激な思想を持つてゐる。そのようなことを口にすれば、狂人扱いは免れ得ぬ。だが、すつきりしたよ。ああ、確かに薄々私もそう感じていた。あまりにも、精靈とは恣意的だ。気まぐれで、残酷だ。ある者には溢れんばかりに加護を与える者もいる。ある者は徹底的にいたぶる。私は」

言いかけて彼は首を振った。

「いや、私事だった。まずは レーンダードシアカのイナゴの大発生から話さねばならん。貴女はもう」存知だらうが、……」

リュは話を聞いて絶句した。

むしろ、馬鹿な！ と声を張り上げた。

「そんなことをすれば、地力はむちゃくちゃになる！ 兵に薬物使用するようなものだ！ 一時的に土地が回復しても、数十年単位、いや百年単位でその土地はサイクルが壊れ、一度と回復できなくなるぞ！ 精霊を過信し過ぎる、連中はそこまで万能ではない！！」

丁寧語も吹っ飛び、リュは拳をシーツにたたき付けた。土地を巡つて争いが起きる。地力が枯渇すれば、餓死者は今回の比ではなくなるだろ？

「そんな馬鹿なことを、許したところのか！？」

言ひやま、リュは口をつぐんだ。許さなかつたから、バルドウイーンは孤立し、追放され、戻つた今も冷ややかな目で見られる。だから彼は、刹那たちが去つた後、人目をしおび隠れるようにして一人ここを訪ねざるを得なかつたのだ。

レーンダードシアカのイナゴの大発生は、昨年の冷害もあって、地獄のような飢饉をもたらした。

あの国には、絶対的血統制度があり、酷く露骨で残酷な身分の壁がある。隸属身分は国家公認で【石投げ】と呼ばれる差別民が存在するくらいである。

差別民は、最も餓死者の出でている層だ。

「田の前に、救える命があるのない。それが、彼らの言葉だ」

バルドウイーンは言った。

精靈の力を使って、大地に強制的に急速な実りを確かに必要だ。正しい。美しい。

だが、善が最善とは限らない。

長いスパンで見れば、更なる地獄が大きなあきとを開けて待っている。

まして、他国の事情、内政干渉だ。

白竜族が、他国の領土の環サイクルを破壊する。

その結果は？

こんな馬鹿なことは、到底正気ではできない。

「せめて、援助で済ませるべきだ」

それならば、惜しまない。

バルドウイーンは再度頭を振った。

「貴女も知っているだろう。冷害の影響はレーンダードシーカに留まらない。どの国も余裕がない 魔界を除いては」

つまり、白竜族は絶対に魔族を頼らない。リュは急ぎ寝台から降りて行動を開始した。

中庭に面してアーチを描く回廊を歩きながら、空の近さ、空気の澄み切った様子に、誠空中城であるな、とリュは思考する頭の片隅で考えていた。

バルドウイーンとは打ち合わせた。

少なくとも、彼の放逐紛いのお気の毒な結末は同情に値するが、リュとしてみればよくぞ身体を張つて止めてくれた、と正直喝采して、彼が誠にレトリバーであれば一緒にお散歩「ーー、などこうである。

いや、大変失礼な話なので、脳内に留めたが、リュとしてみれば、いくら頭を下げても足りない。

先に実現していれば、取り返しのつかぬ事態になつていただろう。針の先にバランスを取るような争いと争いの谷間である平穏なぞ、一気に崩落だ。

目先数十年単位で戦火の炎が、ヒトも大地も舐めるように埋め尽くす。

その炎の上を、リュは歩いて行けるだらうか？

その時、魔族がどういった立場で関わるかといえば、多分 考えたくない。

(まだ、地力は乱されておらぬ)

だが、少なくともそれは先延ばし行為に過ぎない。刹那たちが考えを変えぬ限りは、根本的には解決していない。

(ならば、いっそ ー！)

リュは真っ直ぐに前を見据え、裾をさばいて歩き続けた。

白い花の咲き零れる東屋で、刹那や紫桜音たちはお茶をしていた。他にエルフのスーリア姫と着物姿獣耳のタマモ、オッドアイ銀髪幼女、同じく青銀の神の美幼児、そして 巨大な白虎が寝そべっている。

リュは足を止めた。

彼女が口を開く前に、「あ！」と刹那が気づいて席を立つ。

「リュさん、寝てなくていいのか？」

お気遣いじつも、リュは首を振った。

「寝てばかりでは身体が腐ります。もう十分養生させていただいだので、お暇しようかど」「挨拶に伺いました」

努めて平淡な声とすると、刹那は一瞬何を言われたのか分からないようなきょとんとした表情をした。

リュはもう一度重ねた。

「バルドウイーン殿下に印状をいただきましたので、このまま転移門まで下がらせていただく予定です。皆さんはお世話になりました」

た

一礼すると、エルフのスーリアはあからさまにほつとした顔をし、タマモはその主に枝垂れかかりながら、「ふん」と鼻を鳴らした。幼女は無表情、青銀美幼児は紫桜音の袖口をぎゅっと握つて不審者を見るような目でリュを見上げている。

(バルドウイーンによれば、この幼児が、竜神の未熟な現身うつしゆ、か。神性存在の切れ端とはいえ、誠に文字通り未熟なことよな。女に骨抜きで己の本分も忘れたか。神とは名ばかり、哀れなものよな)

リュは僅かに冷めた目で小さな竜神とやらを見つめ返したが、すぐ視線を外した。

では、と踵を返そつとした彼女の腕を、痛いほどに力で後ろから刹那が握る。

「 ッ

声を押し殺して振り向いたリュに、刹那が煩悶するよう眉根を寄せ、大きな黒い瞳でリュを見据えていた。

「待つてくれよー。そんな、急過ぎるよー。」

何がだ、とリュは言葉を呑み込む。

「いえ、でも私も協会に報告が済んでおりませんし、次の仕事がありますので」

皆が嘘ではない。次の仕事は腐るほどある。城に残してきた部下達は大変優秀な事務処理の女戦士たちだが、流石に彼女達だけで全てを回しきることはできないだろう。ある程度は回るよう組織立てしてきたつもりだが、魔公レベルの案件は、リュが決済せねばならない。

「そんなのつー！ そんな場合じゃないんだよー。あ、ごめん！ まだ調子悪いと思って、説明は後にしようと思つてたんだけど

「

声を荒げかけた刹那は後半声量を落とした。そんなことより、つかんだ腕を放して欲しいとリュは思つたが、黙つて彼の言葉を聞く姿勢を見せた。

刹那はそれで落ち着いたのか、きりつと表情を変え、リュの目を真つ直ぐに見つめた。

「信じられないかもしだれど、俺達、世界中で運命の仲間を探しているんだ。リュさんも、きっと俺達の仲間になるべき人なんだと思う。この携帯電話、つて言つてもわかんないか。これに名前が載れば確定なんだけれど、縁が高まるまで掲載されないから、俺達にも分からんんだ。でも絶対、俺達が迷宮で出会つたことは偶然じやない。運命なんだ！」

リュは黙つた。

「どうか、黙らざるを得なかつた。
誰か、この気持ち、察してください、と自由な方の手で密かに胸を押さえた。

（ナビよ……お前以上に私に精神的クリティカルヒットを負わせるとは……刹那少年、悔れん……）

リュの沈黙を良い方に解釈したものか、刹那は胸元を押さえるリュの手のひらの上に自らの手を重ねた。
そのままぎゅっと握りこむ。女性陣の悲鳴が聞こえた。

「戸惑うのも分かるよ。だけど、協力して欲しい。この世界を救うために、運命の仲間達の力が必要なんだ！」

続けて紫桜音が卓に手をつき、勢いよく立ち上がる。

「お願ひ、私もリュさんは、きっと仲間になるべき人なんだと思う。感じるの！ リュさんは何か違つて、きっと星に導かれた仲間の一人だつて！」

リュは刹那の肩越しに紫桜音の方を見やり、ゆづくつと溜息を吐いた。

「「」みんなさい。私には何が何だか 世界を救う？ 今は魔界とも緊迫状態にありますんし、一時に比べたら平和なものですよ？」

セクハラとしか思えぬ刹那の手を自然に押し戻す形で下げるセ、リュは困ったような笑みを浮かべた。

紫桜音は「ううん」と首を振る。

「それは見せかけの平和なの。これから起る崩壊は、とても恐ろしくて、つまく説明することができない。私達はその光景を見せられてここに呼ばれたの」

紫桜音は唇を強く噛んで、青ざめていた。心配そうに白い虎がのつそり首を持ち上げて主の手を舐める。

「……ん、心配かけてごめんね。とにかく、全ての恐ろしい崩壊を止めるために、たくさん縛で結界を作らなくちゃいけない。それを【星図】と呼んでるの。きっとリュさんも、編むべき星図の一つの星だと思つ。だから、お願ひします。協力してください」

紫桜音は頭を下げる。

リュは刹那よりも、この少女に対して好感を持つた。だが、それ以上に

（もし、私が何も知らなければ、協力しても良かつた。もう少し話はつめただろうけれど、納得すればそれもやぶさかではなかつた。
多分、私は ）

（ここに来て、リュにも見えて来たものがある。

つまり、【何か】は、徹底的にリュと彼らバランスブレイカーの対立を望んでいる。

彼らが動き回れば回るほど、リュの維持すべき予測線は死亡方向へと折れ曲がる。

彼らは崩壊を謡つが、【星図】が完成すればリュは死ぬだろ。つまり、リュが死なぬように予測線を誘導すれば、【星図】の完成なくしても、世界は崩壊などしない。

（あるいは、崩壊とは、【誰】にとっての崩壊か ）

何もかもが、リュを含む全ての事象が恣意的だ。
そもそも誰の恣意なのか。

誰がリュや刹那や紫桜音を駒のように配置し、自由に泳がせているように見えて、誘導しているのか。

リュ自身が駒の指手プレイヤーたらんとしているだけに、この平面状に配置された意図的な道筋がぼんやりと見えてしまう。

（それはそれとして）

リュは握られっぱなしの両手に視線を落とした。

「あの、手、放していただけますか？」

「え、あ？」

やはり刹那は変な顔をした。彼はあっさりと手を放したが、不思

議そうに自分の手とリュの手を交互に見ていた。

「あ、と……リュさん、なんともない？」

「なんともとは？」

「いや……そつか。そつなんだ」

勝手に納得し、刹那は自分の頭を氣まずそうにかいたが、次の瞬間に白い歯を見せて笑つた。

「ちょっと、凄い新鮮かも」

「は？」

「なんでもない、これから、よろしくな」

勝手に決められた。先ほどの会話の流れで、リュは了承したことになつたらしい。

（まあ良いか。元々【その予定】だ）

「どちらにせよ、協会への報告は欠かせませんが、皆さん、今後どうわれるつもりですか？」

「ああ。レーンダードシアカに行くつもりだ。あの国では大変な飢饉が起きているって聞いたからな」

「うん！ 私達の力で、少しでも多くの人を救いたいの。ちょっと遠回りになつちゃつたけれど、スーリアやリュさんが仲間になつてくれたから、きっとダンジョンのことも無駄じやなかつたし、バルも優しくなつてくれたし、皆必要なことだつたんだよね」

紫桜音が呟くと、白い虎が不満そうに喉を鳴らし、尻尾をはたはたと地面に叩き付けた。

「あ、『めん』『めん』。白夜のことも忘れてないよ！ 貴方も新しい私達の仲間！」

彼女が細い指先でその喉元をくすぐると、虎はぐるぐると今度は嬉しげに口を細め、甘えるよう頭を擦り付けた。

それから、はつとしたように紫桜音はリュのほうを振り返って、焦つたように両手をわたわたと振る。

「あ、えっとええと、大丈夫だよ！ 『』の間説明したとおり、もう大丈夫だから！」

リュは無反応に彼女達をただ視界におさめる。

「浄化の力で、もう別の生き物になっているの！ 積れを全部浄化して、新しく生まれ変わったんだよ！ リュさんのこと、一度と襲わないから！……！」

ね、白夜！^{ひやくや} と虎の頭を撫で回し、まぶしいほどに笑顔で紫桜音は獸の太い首に両腕を回した。

これは、たとえ話だ。

黒いヒトデのぬいぐるみがある。

そのぬいぐるみを切り裂き解体し、白く染め直して、新たに白い猫に仕立て直したら。

それは果たして元のヒトデのぬいぐるみといえますか？

（そんなこと、許されるはずがない。人が、命を創造する。人が、命を作り変えてしまう ）

指先まで震えが走り、リュは大地がぶよぶよと感覚を失つて、直

線が崩れて行くかに思えた。

（あの少女は、悪くない。自衛しただけ。イサークは攻撃した。だから、当然の報いを受けただけ。殺されたって、文句は言えない。でも、理不尽だと、許せないと思つのは、私のエゴでしかない。でも、でも）

（でも、あれは由夜なんて、変な名前じゃない。彼は、イサークだと、私はそう初めに呼んだのに）

負の感情が、熱い塊となつて喉下にせり上がる、そうしたら、虎がつい、とリュを見た。

リュは、はつと胸を突かれる。

虎は牙を剥き、するりと主の少女の腕の中を優しく抜けると、恐るべき跳躍力でリュに飛びかかった。

刹那の驚いた顔が一瞬視界を過ぎる。

だが、すぐ視界いっぱいに獣の巨体がのしかかつた。

赤い血のような目には爛々と敵意のみ浮かべ、容赦なくリュの肩に爪を立てる。

大地にたたき付けられるようにして四肢を組み伏せられたまま、リュは荒い息の下で恐ろしい獣を見上げた。

虎ははつきりと威嚇し、腕から血を流しているリュに頓着せず、このまま死んでしまえとばかりに爪でますます腕をえぐる。

呆然とする。

ただひたすらに呆然とする。

明確な敵意が滴るように間断なく落ちて来る。リュの胸が激しく上下した。

遠くで悲鳴がする。

「白夜、駄目っ、リュさんは仲間なのっ じゃなさいーーー。」

黒いヒトデのぬいぐるみをすたずたに引き裂いて、白に染め直し、新たに猫の形にリフォームしたら。

それは果たして元のヒトデのぬいぐるみといえますか？

答えはNO・

もうそれは「白い猫のぬいぐるみ」でしかない。

そして、すたずたに引き裂かれた魂を元に戻すことなんて、神様にだってできやしない。

(……いたーく。わたしだよ。りゅだよ。分からぬの？）

両腕を差し伸ばして、訴えたい。

だが、腕は動かない。

鋭い爪でえぐられ、大地に縫い止められている。

虎の目はかつての彼の無数の眼と同様、血のよに赤く、ただただ敵意で濡れている。

敵意？

違う。

殺意だ。

リュは、イサークにこんな目を向けられたことはない。

一度だつてない。

だから、知らなかつた。

こんなに辛いなんて、知らなかつた。

こんなに苦しいなんて、知らなかつた。

リュはショックを受けていたことにショックを受けていた。もつと冷静に対処できるはずだつた。

リュの優先順位はあくまで己の生存である。

そのためには、鉄鋼鎌のよに精神を研ぎ澄まし、時に感情を理性の前に殺すことも厭わない。

だが、そんのは、ただの机上の空論だ。

(だつて、苦しい)

胸は荒い呼吸に上下し、リュの血の氣を失った唇は、惨めに戦慄いた。愚かにも、その舌先は、いざーく、と名を呼びかけた。だめ、と寸前で呑み込んだのは、息も絶え絶えの理性が必死に手綱を引いたためだ。

腕と肩に爪が食い込むその痛みこそが、リュを正氣づかせる。同時に何よりも打ちひしがれさせた。

目の前の虎とて、特に力を入れているわけではないのだろう。ただ配慮など一切ないだけだ。

本気になればこんなものではないだろう。力も入れず、引き倒している、それだけでリュの肉をえぐつてしまふ。

だが、こんな爪よりも、イサークの触手はもっと恐ろしいはずだつた。巨大な身体と握力は、リュの紙装甲など、彼がちょっと力を入れるだけで潰れたトマトに変えてしまつただろう。

だけど、彼の太い触手がリュをその内側に巻き込み引きずり込んだとして、彼女はそうされても恐ろしいと思つたことは一度もなかつた。

今ならば、よく分かる。

分かつていたつもりで、全然分かつていなかつた、そのことが良く分かる。

(イサーク、お前……本当に、本当に……)

本当に、そつと触れていてくれたのだな、とリュは顔面を覆いたかつた。

彼は、細心の注意を払つて、泣きたくなるほどに注意深く、決して傷つけぬようにしてくれた。

イサークは、力のコントロールが本当に苦手だった。

結局、最後まで自分の力をうまく使いこなすことはできなかつた。

だが、その纖細さは、リュに触れる纖細さは、果たしてどれほど
の苦行であつただろうか。

彼の全神経を集中させて、まるで硝子で出来た葉脈を摘みあげる
かのような注意深さだつただろつ。

リュは簡単に壊れてしまふから、壊さぬよつ。

紫桜音が必死に虎を呼ばわり、刹那が引き剥がそうとする寸前、
のつそりと巨体がリュの上から遠ざかる。

その尾を見ながら、リュは疼痛を無視して無理矢理上半身を起こ
した。

半泣きの謝罪、心配して揺さぶられる。

「いめんなさい、淨化したのに、いんなはずじゃなかつたのに」

あまり揺さぶらないで欲しいとかされる声で訴え、リュは首を左
右に振つた。

「いいえ、私が悪いのです。多分、敵意を持つたから、敏感に反応
したのでしよう」

正確には、紫桜音に対する敵意に、反応した。

だから、彼女の【浄化】とやらは万全で、何の抜かりもなかつた
はずだ。

「あ。当たり前だよつ、リュさん、何度も襲われてるから、怖くな
いわけないよね。私が無神経だつたの。白夜、あつち行つてなさい
つ

追い払う仕草に、虎はしぶしぶといった体で、頭を低くし、ぐる
り方向を変える。リュにはもはや一切の関心も失せたかの様子で視

線もくれず、真っ白な毛並みは筋肉のつねりに合わせて波打ち、命令どおり木立の奥へと消えた。

「今治すから」

少女の手のひらが白く光る。発光したまま押し当つととした時、リュは咄嗟にその手を押し留めた。

「えー?」

「ありがとうございます、でも傷は自然治癒に任せます。見た目より大した傷じゃありません」

「で、でも」

「せつだよ、リュさん、やせ我慢しないで、治癒した方がいい!」

今度は刹那が手を押し当つとするのを、リュは、まっさきりと断つた。

「治癒魔法は便利ですけれど、色々副作用も報告されてるから…緊急性がない限りは、自然治癒力に任せよつと思います」

もつともらしことを言つたが、それは理由の一割も占めていない。本音としては、身体を作り変えてしまつのような力を持った彼らに、己の体を弄繰り回されたくなかったのである。

「でも、リュさんは女性なんだから、身体に傷でも残つたらよくないだろー。」

「お気遣いとても嬉しいですが、ご親切だけいただきまますね

それより、薬を分けてもらえないだろうか、と続けると「ひを、スーリアが苛立たしげに遮つた。

「ほんとうに頑迷な人間ね。刹那たちがこんなに心配しているのに、貴女頑固^{がむかじや}なぐて！？」

「……です」

同意したのは銀髪オッドアイ少女だ。タマモも腕組みして、愉快そうな顔ではない。

とてとてと小さな龍神の少年が走ってきて、ひつしと紫桜音に抱きつき、リュを睨む。

まずいな、とリュは自分の軽率^{けいしやく}に血嘲^{けち}した。確かにうまいやり方ではなかつた。有り体にいって、可愛い^{かわい}いげのない反感^{かんぱん}を買つてしまつ言い方だつた。頭が回つていなかつた。

彼女は、まずは頭を下がた。

「すみません、不快にさせてしまつて……あんまり治癒魔法に頼るなど、一族の家訓なのです。皆さんに迷惑^{めいわ}をかけるつもりはなかつたんですが……っ」

頭を下げて謝罪した途端、急に眩暈^{めまぐら}が襲つて、リュは舌打ちしたくなつた。

このままでは治癒コースだ。

〔冗談ではない、とリュは怖氣で顔面を歪めそつこなる。

「やつぱつ……」と刹那が手のひらを押し当つとつした。その時、ぬ、と大きな影がしゃがみ込む彼らの頭上に落ちた。

「あれ、バルドウイーン、ビリしたんだ？」

刹那は驚いたように見上げたが、バルドウイーンの顔は険しいものがあつた。

「用事を済ませたので、こちらに来たのだが……」

リュは心底助かった、と思つた。バルドウイーンと目が合ひ、全身靈で願いと謝罪を込め、救助依頼する。

ありがたいことに、彼には空氣を読む力があつたようだ。

「え、おいつ」

咎める刹那を無視して、バルドウイーンはその場にしゃがみ込むと易々とリュを抱き上げた。

「まだ治癒していないし、なんでも」

「彼女は治癒を望んでいなこようだ。手当てするので、部屋に連れて行く」

「それなら俺が」

「刹那、君は力はあるが、リュ殿と身長は似たりよつたりだ。私が連れて行くから、心配しなくていい」

何か言おうとした刹那に、リュはあえてバルドウイーンの首に頭を寄せた。刹那が大声を出すたび、耳鳴りがする。そろそろ限界だつた。

「つー」

刹那が信じられぬものを見るよつ、愕然とした風情で声を呑み込む。

「すみません、殿下。お手を煩わせますが、お願ひできますか？」

バルドウイーンはリュの余裕のなさを察したのか、無言で頭を踵を返した。

背中に刹那の強い視線を受けながら。

ゆづくじと振動をさせぬよう歩くバルドウイーンに、リュは心底申し訳なく思い、血の氣の引いたまま謝罪を口にした。

「申し訳ない、恨みを買わせてしましたね」

あの少年は、恐らく拒否された経験は眞無といつていいだらう。リュに執着しているわけではなくとも、プライドを傷つけられたと感じたかもしれない。それが後々どう影響するか。

本当にうまくないやり方だった。だが、結局は同じことか、といつ冷めた気持ちもリュの中には同時に存在していた。

（彼らを、『この世界は思い通りにならぬ』と逃避せるとこついとは、つまり　いすれば同じことになる）

いざれ遅いか早いか。ならば早い方がいい。ただし、バルドウイーンの危険は段違いに跳ね上がるだらう。

その意味で、申し訳ないことをした、ヒコュはいくら頭を下げても足りぬであろうと思つた。

バルドウイーンはそのことをも察したようだつた。

「何。元々疎まれていたところ、一つ一つ加わったところで大した痛痒も感じない。すでに死んでいた命を、恩人に返しただけだ」「そこまで恩義に感じてもらつと心苦しいものがありますね。貴方の命は貴方のものでしかない。誰も誰かの命に責任も義務も負うことはできないのですよ」

できるのは、その努力をすることだけだ。

あるいは、彼は彼を生かすものに返さねばならない。彼の帰属する国家に。それこそが義務であろう。

バルドウイーンは少し困ったように口元に口元もつ、

「私が好きでしていることだ。貴女にも文句は言わせない……と思ふ」

語尾が弱かったので、リュは噴出し、たちまち「アイタタタ」と肩の傷口が引きつって小さく丸まつた。
バルドウイーンは青ざめ、急ぎ客間にたどり着くと、治療の手配をした。

「ありがとうございます。おかげをまで助かりました」

他の者には隔意があるやもしれず、バルドウイーン手すかりの治療を受けながらリュは礼を言った。

「気にしなくていい。私でも、あれは御免につむる」

包帯を巻きながら、バルドウイーンはためらつ様に尋ねた。

「この傷は……」

「ええ。今は白夜というらしいですが。やられました。主への敵意はよく察知するようですね、見事なものですね」

本当に見事だ。見事に彼を作り変えてしまった。もう別の存在なのだと、リュは認めざるを得なかつた。

一時的な魅了を永続魅了【溺愛補正】は遙かに凌ぎ、それすらを

も超える存在の再構成再構築【浄化】の力をまざと見せ付けられた。

「辛いだろ？」「

彼の言葉には、恐らく誰よりも重みがあるはずだった。身内を含めた周囲の異常に取り残され、彼こそが【異常】とされてしまったのであれば、リュの気持ちが痛いほどに分かったのである。

「いいえ、辛くありません……と嘗つつもりだったのですが……自分でも思った以上にしんどいです。このことと血体がショックですね」

まだまだ修行不足だな、とリュは口の端を歪めた。
でも、と同時に思つ。

「どんな形でも……生きていってくれたなら……それでいい……」

例えもつ別の存在でも。
連續性がなくとも。

それはすでに存在の【死】と同義であるとしても。

（……生きておえこれば……はつ、嘘吐きめ……あれは《死んで》いるより酷い、《生きて》などおいらぬ……）

ぎりぎりと柔らかな手のひらの内側に爪を立て、リュは平淡な表情を取り繕い続けた。

一人はしばらく事の守備や今後のことなどいくつか打ち合わせし、「再度逆戻りだが、養生した方がよいだろ？」といつバルドゥイーンの言葉に甘え、リュは彼が出て行くと横になつた。

今回のことは吉でもあり、凶でもある。

危険を理由に、行動の自由は得やすくなるだらけ。

リュは先ほど話しあった内容を反芻しながら、考えを巡らせていたが、結局ある患者から逃れられなかつた。

熱が上がってきたのか、冷たいシーツに頬を擦りつけ、リュは焼けるような息を吐いた。

そして、泣き声のよくなつぬあととまじ、ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

していたそれを漏らしてしまつた。

「…………わあ、く……」

喉が痛い。目が熱い。

(すまなかつた)

リュは身体を折り曲げ、ぎゅっと目を瞑つた。

(本筋、すまなかつた)

泣くな、と愚かさを分かつてゐるの、人であつたときの部分はそれを止めることができなかつた。

(痛かつただらう。苦しかつただらう……何度も何度も！　何度も切り裂かれ、すり潰されたのか。何度も立ち向かつたのか、愚か者！　どうして、いや、私が……馬鹿な子！……逃げればよかつた！　一時撤退すればよかつた！　私は土を食んだところでなんとも思ひはせぬ！　どうして……どうして苦しめる、イサーク！…)

命ばかりか、心も身体も魂すらも！　奪われ尽くして再構成されるなど……！　そんなものは、もはや元の己であるとはいへぬ！

文字通り、生まれ変わつて別の存在になつたに等しい。

（死よりも酷い…………もつれすらも分からぬのか……馬鹿な子。
逃げてくれれば……『生きて』さえいれば、再起をはかることもできたものを……『生きて』さえいれば……）

こんなことになるなんて、思いもしなかつた。

（こんなことになるなら、）

肩口を強く抱きしめる。

血が滲む。それでもリュは爪を立てる。

（こんなことになると分かつていたら、気づかないふりなど……しなければよかつた……）

血を吐くよじにして、リュは認めた。

知っていたのだ、リュは。

イサークが、どんな目で、自分を見ていたか。

彼が葛藤し、苦しんでいたのも知っていた。

自らの姿を恥じ、力を必死に抑えようとしていたのも知っていた。
自分をどうしたいかも、その欲望がどうこう種類のものなのかも、
大体は察していた。

だが、口にしたところどうなつただれ。

彼の全力の欲望を受け止めるなど、できるはずもなかつた。

リュは、死にたくない、その一心でこれまでの生をつないできた
のだ。

何故自らそれを脅かすことができる。

まして、自分自身の魔としての本性とは、相容れぬと向かひつゝ
ともできずに目を反らし続けている。

彼女にできる最良とは、知らないふりをし続けること。

それがお互いのためだと思った。

他に選択肢などあつただろうか。

でも。

もし、イサークが。

彼が、はつきりと、欲しこと口にしていたら。

リュは拒めなかつただろう。

あんな風に触れて、あんな風に見られて、あんな風に大切にされ
て。

「 ツ 」

彼は恥じていた。

彼は恥じていた。

彼は心底恥じていた。

だが、恥じるべきはリュだつた。

卑怯なのはリュだつた。

知らぬふりをしたのはリュだつた！

（信じればよかつたのか。躊躇を許せばよかつたのか。だが、彼ですら彼自身を信じていなかつたのに、どうすれば良かつた。あれに責任を全部負わせねばよかつたのか！？ 誰も誰かの命など背負えない。背負わせたくなどない！ 私の命を捧げて、あれを苦しめればよかつたのか。そうじやないと思ったから、だから！ でも何が正解で何が最善だというの、そんなの分かりはしない！ これが最善の選択の結果だというなりー 全部嘘でまやかしだ！ こんなことなら、こんなことならーー）

その先は口にしてはいけないし、考えてもいけない。

でなければ、折れてしまつ。

リュは淫魔だつた。

生前の彼女の道徳観において、恥じるべき淫魔だつた。

リュこそが、欲していた。

彼女こそが、強く抱きしめて欲しいと訴えたかつた。

遠慮がちに触れる指先に、もどかしさで何度も呑み込んだ。

ぐちやぐちやにされてもよかつた。

全部彼のものになつてもよかつた。

そうされたかつた。

ただ彼女は、拒絶し、隠して、蓋をしたのだ。

(こんなもの　愛であるわけがないつ、ただの欲望だ　！　！　)

しかも、その果てに破滅しかない。

欲望に振り回されているのは、イサークだけではない。

本質から逃れられぬのも。

リュもまた、それ以上に引きずられ、そうなるまいと全てを抑圧した。

歪む音にも耳を塞いだ。

そんなものでイサークの今後をめちゃくちゃにしてしまつべからくなら、とそう思ったこと自体が欺瞞だつたのか。

だが、あまりにもイサークの思考は【ヒト】に似過ぎていた。一時の充足と引き換えに、その後の地獄を彼の幼い精神が耐えられるとは到底信じ難かつた。

まして、リュは死にたくなかつたのだ。

他の淫魔のようになきられない。

他の魔族のように奔放に生きられない。

死と引き換えの色と戦いの快樂に諸手を上げて賛同などできない！

ただ何事もなく、一日一日を平和に暮らしたいだけだ。

そこに彼も、他の皆もいて、日々を維持したかつた。

その為に、目も耳も塞いで、知らぬふりをした。

それすらも許されないというのか。

それを自らに許してはいけなかつたのか。

もしこの本質に身を委ね、後先考へずに行動していれば、この結末は回避できたのだろうか。

こんな苦しい後悔といつ名の未練は回避できたのだろうか。
そうリュは答えのない問いに、自問自答を繰り返し続けた。
朝日が昇れば、再び蓋をする。もう覗いて見たりはしない。
誰にも言わない。

恐らく今夜見る夢は悪夢以外なにもない。

挿話・わけがわからぬよー

とある世界で

【わたし】は姪が紹介してくれた『ちょっととかなりとつても変わったお友達』のゴンゴンを出迎え、密間に対面に話をしていた。
ゴンゴンは外国人なので、正座は崩してもらっている。

「日本語で物語をお書きになるなんて凄いですね」

「日本文化が大好きなの。アタシ、『郷に入つては郷に従え』なのよー！ 言語の取得は、現地の文化に身体を埋めてこそよー！」

「ゴンゴンは身体は男性だが、心は女性なのかもしれん。雄叫ぶ姿は恼ましいというより恐ろしいが、その日本語能力には目を見張るものがあった。彼女（彼）は本来とても頭の良い人なのだろう。

「原稿、読ませてもらいました。これはもしかして根底には【ブレーンワールド宇宙論】を考えているのかしら？」

誤解を恐れず非常に簡単に言つと、宇宙を膜の時空と考え、この膜宇宙は更に高次元時空に埋め込まれているとするモデルである。宇宙の始まりはビッグバンと言われるが、何故無から有が生じたのか、現在はつきりとした説明は誰にもできない。

できるのは、数学的、物理学的に推測することだけだ。

この推測の一つに、高次元時空に浮かぶあるブレーンワールドと

他に存在するブレーンワールドが接触・衝突することで、新たなブレーンワールドが生成されるとするエキピロティック宇宙論というものもある。

かなり無茶な比喩として、無数の布が垂れ下がる長い長い無限の回廊を考えて欲しい。この布は揺れ動き、前後の布が接触すると新たに布の生成消滅が起ころう。

また、余談ではあるが、超弦において 閉じた弦すなわち輪になつた弦とは違い、開いた弦を考えると、この弦の端点は固定が必要である。この端点を固定する膜をロブレーンワールドとする。

「そうよー。でも本当は神話なのよね。昔の人たちも、宇宙の生成消滅や時間・時空というものについて考えをめぐらしていたんだわ。ああ、これはインドの神話ね。

『一つの宇宙の生成消滅する時間は、ある神の一昼夜である。カルバ一劫』 43億2000万年はある神が起きている昼夜の時間であり、この神は同じ期間だけ眠りにつく。

この神の目覚めによって宇宙は創造され、この神が眠りにつくとによって宇宙は吸収される。

すなわち、宇宙の生成消滅はある神の一昼夜(86億4000万年)である。

この神もまた常命であり、神の100年(311兆400億年)が繰り返されると、彼もまた寿命が尽きる。

しかし、これもまた更に上位の神の一昼夜に過ぎない。

人の基本単位が昼夜のサイクルであるように、神々もまた一昼夜の連なりを繰り返し、宇宙の破壊と創造は無限のサイクルとなつてゐる……』

「ドヤ?」

「いや、ドヤ顔のオノマトペは勘弁してください。変なところまで

日本に染まつちやつてますね

ゴンゴンは小指を立てて「おほほ」と笑った。

それから、とても 悪い顔をした。

「だつて、基本理論でしょ？ ブレーンワールドなんて、アタシたちの業界じゃあ、とつぐの昔に存在が証明されているわ。ねえ、D-1ブレーンワールドとロッブレーーンワールドをつなぐ紐は、【これ】よ。アーテマンとプラフマンは本当にどこかで戦っているのかもしれない。世界最大のSF聖書は実際にどこかで起つたもう一つの世界の話かもしれない。アメリカ発の宇宙神話だつて本当で、その本当がこの宇宙に滲み出しているのかもしれない。重力子はブレーン間を自由に飛びまわり、魂もまた巡るわ」

私は目を眇めた。全く、様式美というものを理解しない。もう少し腹の探し合いをしてからにして欲しい。

「弓納持と鈴木で圧力をかけたつもりだつたんですが、取りやめては下さらないのですね」

「止めないわあ。日本の可哀想な魔法使いさん。貴女たちつてともチャーミングよ。食べちゃいたいくらい素敵。ワザワザアタシたちのために検体になつてくれるんですもの」

「好きで そうなわけじゃない。我々の苦悩もお察しください。ほとんどの一族の者は、自らの業を知らぬのです」

私の可愛い姪もそうだ。彼女もまた何も知らずに、この悪い外つ国の魔法使いに顔つなぎで利用されてしまった。

ここに【辿り着く】なんて、本来ありえぬこと。私は私の防衛のために、ここを閉じているはずだつた。

だが、姪自身が鍵になり、膜の閉じた受容体は開いた。

レセプター

「知らずにいることが貴女方の最大にして最低の防御ですものねえ。貴女なんか、知っているから、別のブレーンワールドに流されないために自らお座敷じやない？ 全く、アタシたちにしてみれば、貴女達は垂涎ものよ。ブレーンに囚われないで自由に移動できるだなんて！」

「……自由に、とは語弊がありますね」

「アタシ達世界の囚われ人から見れば、自由にと言つべきね。貴女達の厄介な性質がなければ、浚つて孕ましたいんだけれど……」

「姪に出したら殺します」

「これだけは釘を刺した。

「大丈夫よ、唯ちゃんと子作りしても生まれてくるのはアタシの魂の優性遺伝ね。んもう、他の魔法使いの系統と掛け合わせができるないなんて、残念だわ！」

心底残念と濃ゆい顔に書きなぐつてあるが、どこまで本気なのか、全部本気だらうな、きっと。

「ま、とりあえず、ご開帳は止めないわ。アタシたちは、いえ、アタシは深淵を覗き込みたいの。だから、このチャンスを逃さない。こんなにはつきりつきり痕跡がべつたり！ ご挨拶に伺つたのはアタシなりに仁義を通したつもりよ。先に訪れる災禍についてごめんあそばせつてね」

止めたければ力づくで止めてもいいのよ、と彼女は厚ぼつた唇を吊り上げた。

残念ながら、今の私達には、そんな力はない。できることは、お願ひすることだけ。

「もし、どうしても【異界の物語】を開くつもりない、お気をつけて。せめて犠牲は最小に努めてください。【エルの物語】はおそらく異界の神の」

続ける言葉は、彼女に届いているのだろうか。

彼女は肩をすくめた。

「やつてみなきや分からないわ。そうね、アタシからも貴女に忠告するわ。貴女も船なのよ。自ら錨をブツ差して可能性を溝に捨てているだけ。大胆さが足りないわ。アタシならそんな生き方つまらなくて耐えられない」

「私は私で満足しています。貴方のようにには生きられない

でも、と私は力を抜いた。

「S'r·Gōn?lene。貴方のような生き方もきっと樂しいで
しょうね」

ええ、と彼女はウインクをした。

私は思わず苦笑してしまった。好き勝手に生きているが、憎めない人物だ。

だから。

「またお会いしましょう。次に会う時、貴方は貴方ではないかもしない。でも、また。交差する宇宙で再会しましょう」

「ええ、きっとね！」

「」は縁に濡れる日本家屋。どこにでもつながっていて、どこからも閉じている。時空の交差点。

きつと彼女とまた重なることもあるだりつと、私は再会の約束を交わした。

挿話・わけがわからないよー（後書き）

欄外にて念の為に。

物語の為に理論は歪めています。この話はフィクションです。

キヤハハー！ が許されるのは小学生までだよね！

白虎に傷つけられたりュは、数日後白龍城から退城し、刹那達とともに件のレーンダードシアカへと向かうことになった。

とはいえ、おって合流する旨刹那を説き伏せ、現在は別行動である。

目立たぬ外套を羽織り、雑踏の合間を縫うように急ぎ足で歩きた。が、リュは今朝方のバルドウイーンからの情報を元に思料してい

バルドウイーンから再度「地力の乱れ」について懸念される旨説得があつたが、結局刹那一行達は飢饉に見舞われているレーンダードシアカ救済方法については考えを変えなかつたようだ。

リュにしてみれば、やや不思議に思うところもある。

信用度駄々下がりの刹那はともかく、遺恨による色眼鏡を外してみれば、紫桜音はそこまで他人の意見を頑迷に聞かないとも思えなかつたのだ。

（言葉を尽くせば分からぬわけでもないよう見えたが……バルドウイーンが口下手なせいか？ あるいは彼自身が軽んじられるからか？ しかし……）

悩ましくするリュ自身が彼らを説得すればよいのかも知れない。

だが、まだ信頼関係というより、リュの立場は不安定である。

何より現段階、彼らに【敵対者】と見なされていない【潜在的敵対者】であることを、こちらだけが把握しているというアドバンテージを失うのは、はつきり言つて悪手である。

ずっと俺のターンならともかく、何故伏せたカードを直ちに晒してみせる。

まして、リュとバルドウイーンは、しばらくは役割を完全に分担する方針で決めてしまっていた。

すなわち、リュはいまだ彼らにとつてグレーゾーンであることから、このままそれを維持。一步引いて、中立的姿勢で【恨みを買わない】役に。もっぱら裏で暗躍予定である。

また、バルドウイーンは、「自分はすでに手遅れなので」と【諫言役】に。損な役割だが、彼自身は自らその役を請け負うことを強く主張した。本人希望なら、強固に退ける理由もない。ないはずだと言い聞かせる。ゆえに、表で動いてもらひ。

幼稚園の先生の役割分担のようなものだ。

複数の優しい先生の中に、一人、園児を注意し、叱る嫌われ役の先生がどうしても必要なのだ。

（さて、彼ら自身が思考停止しているのか……思考停止させられているのか……どんな環境で育つたか知らんが、想像力の欠如した子供が戦略級の兵器を持たされて、本人もその威力も分からぬままぶんぶん振り回しているわけだろ。びくびくご機嫌伺いしながら取り上げる算段弾いて、無理ならどうにか癪癪起^{おじな}こされないように家から追い出そんなんて、私も大概阿呆で惨めな道化だ。はつ、いずれにせよ、理を説いても駄目なら、押しの一手は悪手。これ以上は仕方あるまい）

無理は禁物だ。

無理強いの無残な結果は、痛いほどに理解した。

同じ轍は踏まない。

一方で、確かに、彼らの意見にも一利あるのはリュとて認める。

元の世界でも、綺麗な事務所でうまいものしゃぶつているホワイトカラーが「安易な新品種の、化学肥料による農業革命をすべきではない！」とロビー活動を行つたところで、現に水も物資も何もな

い現場で喘ぐ人々からすれば、「舐めどんのかワレ」と巻き舌に腕まくつて激昂するだけだろう。

言つてみれば、今回の件に対するリュの善は「何も成さぬ消極的善」であり、何も成さぬ故に責任も失敗も生じない逃げ道である。

だが、リュはこれまで逃げ街道をひたすら走ってきた。

今更、この程度で方針を揺らがせない。

（自分の命を優先して何が悪い）

リュの言い分である。

そして、リュの手が届く範囲。

それだって、保守するのに馬車馬のように働いて、日々過労死しそうになつてゐるのに、赤の他人の面倒まで見られるものか、ともうづいぶん前に決めてしまつていた。

（だから、これは【善】じゃない。どうだつていい。私が私の）

そう、自分の命が何よりも惜しいから、行動するのだと。リュは目的の建物を前に、足を止めた。

赤煉瓦の建物には、黒いプレートに金字でこうつ掲げてある。

『貴方の町の！ アドベンチャラーズ協会』

ヨツテケ支部。

何やら脱力感を誘う支部名である。

たのもー！ などと言つわけでもなく、静かに扉を開けたリュは、手続き待ちの人々の最後尾に並び、自らの順番が来ると胸部が異様なマスクメロンと化している金髪の受付嬢に、懐から書状を出して手渡した。

受付嬢は確認し、「では、いらっしゃ」と笑顔のまま別室に案内する。

先に部屋に通され、扉が閉まつた途端、

「……業務中つまみ食いは程ほどに」

筋骨たくましい男性及び細身の少年の上に跨つていたとふわふわマロンブラウンの少女と髪の縁の髪の妖艶な女性職員は、あら？ とばかり動きを止めた。

「殿下、監禁プレイ終了したつすか？」

あどけない笑顔で、マロンブラウンの少女が尋ねる。リュは努めて平静に「プレイではない」と訂正した。

「あらり、違つたの。殿下もついに田覓めたのかと思つて、お祝いの品を折角調達してきたのに……」

受付嬢に勝るとも劣らぬ立派な胸の女性職員が、己の縁髪をかきあげながらけだるげに言つ。リュは今度も「祝いの品ならせめて使用前、包装状態にしておけ。ちなみにいらん」と忠告した。

最後に、後ろ手に扉を閉めた金髪受付嬢が、

「殿下ー これ白紙ですよー」

びりびりと破いた書状を光源に透かし見ては裏表ひっくり返し首を傾げている。リュは三度「白紙でよい。別室に案内してもらつための方便だと」のやり取り何回目だ」と突つ込んだ。

それから深い嘆息を何とか呑み込んで、白目を剥いて昇天している男性一名を一瞥し、「自らお帰りいただくな。その後のケアは各自責任を取ること」とした。

「「はあーい」」

夢遊病患者のような足取りで去つていく哀れな犠牲者に心中両手を併せ、第三者がいなくなつて初めてリュは応接用ソファに座つた。さて、と三人の女を見やると、彼女達は互いにど付き合ひ、床に膝をついた。

「ロリ」
「ペド」
「ショタ」
「「「御前に」」

リュはとりあえず、何かあれだよな、と天井を突き抜けて遙か遠くを見つめた。
彼女の唇がぽつりと零す。

「お前ら、改名する気はないよな」

たちまち、三人娘はかつと目を見開き、姦しくなつた。

「酷いつ殿下横暴ですう！」

「そつよお、淫魔の伝統的高貴な名前なのよお」

「殿下なんて貧乳のくせにっす！」

「そうですっ、貧乳！」

「」の貧乳！――

お前ら……とリュは心に突つ伏した。
ホルスタインとマスクメロンとロリ体型にだけには言われたくない。

(しかも人の魔力ここぞとばかりに吸い取るな)

「殿下、これは割と珍味です」

まぐまぐと口を動かしながら、これは金髪淫魔のペドである。彼女の豊かなお尻から、黒い尻尾が機嫌にゅらゅらと揺れている。リュは何か自分から魔力以外にいわゆる活力が失われていく気がしたが、一応これだけは言つておいた。

「感想はよろしい」

彼女達はアドベンチャラーズ協会においてのリュの部下である。色々と難はあるが、与えられた仕事はきっちりこなすので、割とまともで使い手のある優秀な部類に入る。

彼女達への報酬は、『男漁りの場』といつよりは餌場の提供と、魔族でありながら変わり種故に何かたまにゲテモノ食べたくなるのよねと評されたリュ自身の『珍味』^{まいゆ}である。

彼女達の今の流行は『貧乳』と罵るプレイらしい。

(普通だし……普通だし……)

淫魔では平均だし、と二度自分に言い聞かせていく時点で、リュのダメージは割と大きこようであった。

「それで、連絡しておいた件の首尾は？」

ようやく本題に入った時には、疲労困憊であつたが、三人娘はリュの期待に大いに応えてくれた。

「ういうこ、HUGOに通達済みっす。あ、これが計画書っす」

予算から輸送・配給方法、その後のモニタリング予定まで、この短い日取りでよくやつてくれたとリュは眞面目に労をねぎらつた。

「おつと、財源は問題なしっすよ。こないだの総決算で、ちやーんと寄付金内訳拠出額上位各国一覧ばらまいてやつたっすからねー。白竜族の奴ら曰の色変えてたつすよ、うひひひひ。ケツの毛まで巻り取るっす。当面資金源確保は大丈夫っすよ」

「どちらにせよー、魔界一武道会の上がりで一けつこいつお金余つてますしー」

もうけましたものね、と憂い顔で指先を頬に当てて、緑髪のショタが言つ。

「殿下本当に、殿下おやめになつてこちら一本にされねばよしこのに」

殿下止めれば、と普通に言えてしまつのが魔族である。

リュは特に魔力が甚大なわけでも、純粋に強さを備えているわけ

でもない。

故に、皆特にリュを恐怖することはない。

下手をすれば、お隣の気の毒なリュさん、扱いである。

彼女が曲がりなりにも淫魔達を従えられるのは、一応夢魔級能力が高位であることもあるが、一番の理由は別にある。

「……それはともかく、誠にご苦労であった。まだまだこの活動は走り出したばかりだ。今回のレンダードシアカへの援助活動は、各国にICGCの意義と存在を印象付ける機会でもある」

リュはぐるり三人を見回した。本来彼女は際立つて頭が切れるわけでもないし、カリスマがあるわけでもない。

一瞬言葉に詰まつたが、彼女は頼むとか期待しているとかまあそういうことを言った。

いまいち締まらぬ、と自分でも思つたが、淫魔三人娘はリュにそういうことは一切期待していない。

彼女達は、刺激を求めているだけだ。

つまり、リュは生存戦略に走るあまり、魔界ではかなり前代未聞のアクロバティックな内容を計画実施し続けてきたが、それ故に享楽的な淫魔達の高い支持を得ているのであった。

その後、リュは他にもいくつか指示をし、その中には貪欲公とのコンタクトも含まれていたが、最終的に三人娘達の感想は以下である。

「うわ、殿下相変わらずえげつねーっす」

「腹が真っ黒ですぅ」

「しかも貧乳だわあ」

最後関係ないだろ、とリュは突つ込む気力もなかつた。

なお、余談ではあるが、ICGCは、『International
al Committee of the Green Cross
』の略称である。

キャラハー！ が許されるのは小学生までだよね！（後書き）

淫魔・夢魔のバストについて

創造神級

魔界ホルスタイン級

魔界マスクメロン級

ほもさぴえんす巨乳級

リュ

各人の神秘なる理想階級

口リ仕様級（これは完成体セルです。戦闘力はフリーザさまを超えています）

派閥について

巨乳派 作者は貧乳派から改宗しました。

貧乳派

中道派

全乳全能派

私たちは登り始めたばかりなんだ。この果てしないおっぱい道をよ……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7136y/>

死亡フラグ回避の華麗な方法～物語の裏で蠢く皇女様血涙編～
2012年1月10日22時50分発行